

岐 阜 大 学

日本語・日本文化教育センター紀要

2019

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター

# 岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要

2019

## 論文編

### 【研究論文】

複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師の文化提示意識の変容

—中国の大学に赴任した教師Kの語りの分析—……………松尾 憲 暁 3

### 【研究ノート】

明治の地芝居の一側面

—『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりに—……………土谷 桃子 17

## 年報編 (2019年4月～2020年3月)

1. 日本語研修コース…………… 29
2. 日本語・日本文化研修コース…………… 43
3. 日本社会文化プログラム…………… 46
4. 全学共通教育…………… 48
5. 年間行事…………… 49
6. 交流ラウンジ…………… 58

## 資料

岐阜大学留学生数…………… 62

## 巻頭言

日本語・日本文化教育センター長 橋本 慎吾

岐阜大学日本語・日本文化教育センターの前身である留学生センターが省令施設として発足したのは1996年5月のことでした。発足当初、センターの専任教員（当時は教官）は5名で、私もその一員として9月に着任しました。10月から国費外国人留学生対象の日本語予備教育を実施する日本語研修コースを開始し、以降業務を多様化させながら活動を続けてきました。2018年に日本語・日本文化教育センターに改称し、現在に至ります。この24年の間にセンター教員の入れ替わりがあり、発足当初からのセンター専任教員は現在では私一人だけです。経過した時の長さを感じるところです。

この『紀要』もセンターの歩みとともに発刊を重ねてきました。留学生センター発足から2年後の1998年に「留学生センター年報」を創刊、翌1999年に「留学生センター紀要 創刊号」を発刊しました。年報は第3号まで発刊し、その後2001年に紀要との合冊となり、それまでの紀要は創刊号、第2号と号数表示でしたが「紀要2000」から年数表示に変えて発行してきました。前号「紀要2018」から「日本語・日本文化教育センター紀要」となりましたが、センター紀要は創刊号から数えて今号「紀要2019」で通算22号を数えます。ここで、紀要を発刊し続けてきたことの意味について考えてみました。

第3号から年報と合冊になり、センター紀要はセンターの活動内容を総合的に報告するものとなっています。紀要を通読することにより、センターがこの24年間に行ってきた活動の全容を知ることができます。また、過去の状況を遡る際に、紀要は24年分のセンターの活動内容が時系列で掲載されており、何より正確に過去の情報を確認することができるという資料的な価値もあります。

センターの業務は多岐にわたりますが、中核となる業務は日本語と日本文化の教育と研究であり、センター紀要はセンターが行っている日本語・日本文化教育を詳細に報告する場であるとともに、教員の専門研究活動の公開の場でもあります。手厚い教育を行いながら、教員は専門性の高い研究活動にも取り組んでいます。その研究活動報告の場がこの紀要であり、専任教員、非常勤教員が真摯に取り組んできた研究のありようがこの通算22号の中に綿々と記録されているのです。

また年報、論文だけではなく、巻頭言、編集後記にもセンターの置かれた状況が表われています。巻頭言は編集委員長であるセンター長が執筆してきたものですが、この巻頭言は、目まぐるしく変わる情勢の中、センターがいかに活動を行ってきたかを、その時々々のセンター長の立場で記述したものになっており、その時その時のセンターが置かれてきた状況を対外的な視点で見ることができます。巻末の編集後記も短いながらもその年の国内外のトピックやその年度の大きな行事が書かれています。こうした部分も、号を重ねることによって、違った視点でのセンターの活動を記す役割を果たしているのです。

24年をかけて22号を重ねてきたセンター紀要。これからも日本語・日本文化教育センターの活動を包括的に報告する資料として、広く活用されることを願っています。

今号は論文1編、研究ノート1編、そして2019年度の年報、資料を掲載しています。論文を執筆いただいたお二人の先生方、年度報告を取りまとめてくださった編集委員の皆さんに感謝申し上げます。



## 論文編

複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師の文化提示意識の変容

—中国の大学に赴任した教師Kの語りの分析—……………松尾憲暁 3

明治の地芝居の一側面—『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりに—……土谷桃子 17



# 複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師の 文化提示意識の変容<sup>1)</sup>

—中国の大学に赴任した教師Kの語りの分析—

Changes in Approach to Teaching “Japanese Culture” by Japanese Teachers from Multilingual and Multicultural Backgrounds: An Analysis of a Narrative by Lecturer “K” Based in a University in China

松尾 憲 暁

要旨：

海外で日本語を教える日本語母語話者教師<sup>2)</sup>には「日本人であること」が求められがちであるが、複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師は日本語を教える中でどのようなことを感じるのだろうか。本稿ではメキシコ人の母親と日本人の父親を持ち、複数の言語文化が混ざり合う環境で育ったKが、中国の大学での日本語教育に関わる中でどのように自身の文化提示意識を変容させていったかに焦点を当て分析を行った。Kは日本語教育に携わる中で常に不足感のようなものを感じていた。現場において日本人日本語教師に求められる「日本人性」は、Kに、「日本は一つでは語れない」と思いながらも自身の背景については語れないという葛藤、典型的な“日本”を提示することで学習者の期待に応えたいが学習者のステレオタイプを崩したいという葛藤をもたらししていた。本来境界が曖昧で、多様性を帯びているはずの日本が、日本語教育を通じて“日本”の輪郭を作り上げていく。日本語教育が、多様な価値観を尊重し、多文化共生のプラットフォームとなっていくためには、暗黙的に生じている日本語母語話者教師と非母語話者教師という二項対立を批判的に捉え直していく視点が求められるだろう。

## 1. 研究の背景

### 1.1 日本語母語話者教師及び非母語話者教師に関する研究

国際交流基金が2018年度に実施した調査（国際交流基金 2020）によると、日本語教育を実施している海外の教育機関に所属している教師数は77,323人であり、そのうち日本語母語話者教師の数が16,252名と全体の21.0%を占めている<sup>3)</sup>。また、1機関あたりの日本語母語話者教師数は初等教育機関で0.7人、中等教育機関で0.3人、高等教育機関で1.6人、学校教育以外で1.5人と、高等教育機関と学校教育以外で多くなっている。このように日本語母語話者教師と非母語話者教師によって構成されている機関も多い海外の日本語教育においては、教師に関する研究はそれぞれを対象にして進められることが多い。

日本語母語話者教師を対象とした研究としては、教師の変容に焦点を当てたもの（例えば、小澤・丸山 2010、松尾・香月 2018など）、望まれる資質や能力に言及するもの（例えば、中井 2009、平畑 2010など）などがある。日本語母語話者教師としての役割を問う研究もそのような研究の

一つであるが、そのうち、平畑（2008）は、アジア地域における日本語母語話者教師に求められる役割について研究し、当該地域では「教育能力」「人間性」「国際性」の3つが日本語母語話者教師に求められると述べ、その具体例として、「日本人らしい日本語が指導できる」「日本語・日本語教育に関する知識がある」「日本文化・日本事情についての知識がある」「日本人であること・日本人の代表であることへの自覚がある」を挙げている。

一方、日本語非母語話者教師は海外における日本語教育において中心的役割を担っているが、研究としては母語話者教師を対象にしたものと比べると少ない。その内容を見てみると、学習者に近い視点を持つ日本語非母語話者教師の利点やその役割に言及するもの（例えば、カイザー 1995、石井 1996、陳 2012など）、非母語話者教師のビリーフ<sup>4)</sup>に焦点を当てたもの（例えば、久保田 2017、星 2016など）などがある。また、陳（2012）は非母語話者教師は母語話者教師との比較で自身の日本語力などに不安を抱くことがあることを報告している。

このような日本語母語話者教師、非母語話者教師という区別は明快で、それぞれの特性から教育現場における役割を考え、どのように両者が協働して海外の日本語教育現場を作り上げていくかを考えるためには有効である。だが、そのような区別は、日本語母語話者教師ないしはそれと同義で用いられる日本人教師の正当性や優位性とも結びつきやすい。本名・岡本（2000）は、アジアの日本語教育の現状・課題を論じる中で、日本人が「日本語は日本人のものである」という過剰な言語所有意識を持っていること、そして日本語非母語話者の正当性を認めながらもそれを批判している。

このような日本語母語話者教師が持つ優位性を、平畑（2008）は、「母語話者性（nativeness）」「日本人性（Japaneseness）」（p.9）という概念を用いて説明している。「母語話者性」とは「母語話者であること」であり、「日本人性」とは「日本人であること」をさす。「母語話者性」とは言語面において生起するものであり、日本語非母語話者である日本語非母語話者教師にとっての魅力である一方、自身の劣位を認識する要因となる。また、日本語母語話者教師には「規範としての日本語」「完全な日本語」のモデルであることが求められ、音声・作文・会話等文章産出における「日本人らしさ」の追求という形で表れる。一方、「日本人性」とは歴史的・政治的な要因も絡む、さらに抽象的かつ複雑な概念であり、ステレオタイプとしての日本人像も影響する。これは「日本人」と、日本語使用によって、「日本人ではない」と定義される「日本語非母語話者」に対応する形で生起する。

## 1.2 従来の研究から抜け落ちる教師の存在

ここで、このような二項対立的な捉え方に収まらない教師の存在に目を向けてみたい。田中（2013）は、日本語の「母語話者教師＝ネイティブ教師＝日本人教師」、「非母語話者教師＝ノンネイティブ教師＝外国人教師」という図式が日本語教育において問題視されることがないのは、このような「図式に十全におさまることのできる人々がかなりの割合を占めていたからではないか」（p.107）と指摘し、従来の二項対立的な図式をずらしたり、攪乱させたりしていくために、「単一民族国家」（小熊 1995）という思想に支えられた「日本語＝日本人」という図式には収まらない人々を研究の俎上に乗せることを提案している。田中は、具体的な例として、「「非日本人」であるが「日本語のネイティブ」であったり、「日本人」ではあるが「日本語のノンネイティブ」であったりする人々」（p.107）を挙げているが、他にも、両親のどちらかが日本語を母語としな



い、複数の言語文化環境で育った人々もここに含まれるものと考えられる。

では、1.1で述べた日本語母語話者教師に求められる役割は、複数の言語文化環境で育った日本人が日本語教育に従事する際にもそのまま当てはめることができるだろうか。例えば、「日本文化・日本事情についての知識がある」という例を取り上げても、そもそも明確な境界がない日本文化というものを、複数の言語文化が混在する環境で育った人々が、日本文化とそれ以外の文化とを明確に分けて捉えることは難しいであろう。

日本語教育を含む外国語教育は言語のみを扱うのではなく、その言語と関わる社会や文化イメージを合わせて提示する。例えば、日本語の初級テキストで見られる「わたしははしでごはんを食べます。」という例文には「日本ではおはしでごはんを食べる」という文化的側面が含まれる<sup>5)</sup>。この例文の発話者が日本人である場合、必然的に「日本人はおはしでごはんを食べる」というようなイメージが想起される。このような一般化された文化の提示は国内外問わず起こりうるものではあるが、特に海外の日本語教育の現場においては、所属機関や同僚の非母語話者教師、そして学習者などから典型的な“日本文化”や“日本人”像が求められやすい。そうすると、複数の言語文化環境で育った日本人教師は自身が持つイメージとの間に様々なズレを感じ、そのようなズレから葛藤が生じる可能性がある。

有田(2016)は、日本語教師の抱く葛藤について、それを個々の教師の資質や能力に帰着させている現状に疑問を呈し、「日本語教師の葛藤(中略)を、日本語教師という社会的役割に組み込まれた構造的な問題と捉えなおし、その本質を分析していく試みは、その起因する問題に迫り、回避の可能性を探り得る」(p.3)と述べている。この指摘を踏まえると、複数の言語文化環境で育った日本人教師の葛藤を「母語話者性」「日本人性」から派生する構造的な問題と捉え分析していくことは、二項対立的でない形での日本語母語話者教師について考える手がかりを我々に与えてくれるものと考えられる。

そこで、本稿では、メキシコ人の母親と日本人の父親を持ち、9歳までメキシコで生活していた調査協力者Kの語りを分析し、海外の日本語教育現場においてKがどのように自身の文化提示意識を変容させていったのかを見ていく。Kの語りの中に表れる葛藤を丁寧に捉えていくことで、日本語母語話者教師及び非母語話者教師という二項対立で括られることが多い現状を捉え直す一助としたい。

## 2. 調査の概要

### 2.1 調査協力者：Kについて

本研究の調査協力者は、メキシコ人の母親と日本人の父親を持ち、中国の大学で日本語を教えた経験を持つKである。Kはメキシコと日本の国籍を有しており、日本では日本人として生活している。また、スペイン語と日本語の二言語話者であり、日本語の運用能力に関しては日本語母語話者と同等である。母語はスペイン語であるが、教育は日本で受けたため、Kは日本語を「第二の母語」と捉えている。

Kは9歳までメキシコで過ごし、現地の小学校に通っていた。母親は日本語がほとんど話せず、家庭でも学校でも使用言語はスペイン語であった。9歳からは日本で暮らし始め、日本の学校に通っている。日本語はその頃から使い始めているが、メキシコの学校で英語教育を受けていたこ

ともあり、それほど苦労は感じなかった。この時期も家庭内での使用言語はスペイン語であった。このような、家庭内ではスペイン語、外では日本語という言語環境は大学で一人暮らしを始めるまで続いた。

大学卒業後、民間企業に就職してからは再び実家で暮らし始めたが、その頃から父親は海外に単身赴任したため、母親と妹との3人で生活していた。家庭内での使用言語はスペイン語であった。この生活はKが日本語教師として中国に赴任するまで約8年半続いている。Kは3年半民間企業に務めた後、言語への興味と日本に住んでいる外国人を支援したいという思いから、民間の日本語教師養成講座を受講し、その後、日本語教育専攻の大学院に進んだ。修士課程修了後は中国の大学にて3年間、外国人専任講師として日本語教育に従事した。

帰国してから現在までは、大学で留学生支援の仕事に携わっており、日本語は教えていない。職場での使用言語は日本語と英語であり、スペイン語の使用は遠方に住んでいる家族との会話に限られている。

## 2.2 調査協力者選定の理由

Kに調査協力を依頼した理由は二つある。一つは、Kがメキシコ人の母親と日本人の父親を持つ、複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師であったことである。日本語母語話者教師の多くは日本人の両親を持ち、日本国内で育っている。その中で、Kのような複数の言語文化環境で育った教師は稀有であり、典型的な日本語母語話者教師の枠に収まらないと考えた。

もう一つは、Kが海外で日本語を教えた経験を有していることである。Kは中国の大学では「日本人の先生」と呼ばれていた。上述した通り、海外の日本語教育現場では、国内の現場と比較し、日本語母語話者教師と非母語話者教師の役割が異なっている場合が多く、「日本人の先生」「○○人の先生」という括り方で学生から呼ばれることが多い。そのような現場では、外国人教師として赴任したKに対しては「日本人性」が求められやすいと考えた。

以上の点から、Kに協力を依頼したことは本研究の目的に十分に適うものであると言える。なお、Kと著者は、Kの大学院時代から面識があり、Kが日本に帰国した後は研究面でしばしば交流する関係にあったため、インタビュー時にはラポール（信頼関係、rapport）が形成されていた。

## 2.3 調査方法：インタビュー

本研究では、リサーチクエスチョンを「複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師は、海外の日本語教育現場においてどのような葛藤を抱くのか」とし、インタビューを行なった。インタビュー前の質問項目としては、次の5つを考えていたが、適宜調整を行いながらインタビューを進めた。

- ① 赴任前、自身にどのような役割が期待されると考えていたか。
- ② 赴任してから、何か違和感を感じるような出来事はあったか。
- ③ あったのであれば、それに対してどのような行動を取ったか。取らなかったか。
- ④ それによって、何か変わったか。
- ⑤ それについてどのようなことを思ったか。

インタビューは2019年1月11日に対面にて行い、インタビュー時間は40分16秒であった。イン

タビューはKの承諾を得た上ですべて録音し、録音したものを後日すべて文字化し、それをデータとした。また、後日、分析過程で生じた事実関係に関する疑問に対して、メールやSNSなどを通してフォローアップを行なった。

以下の分析において、□で示した部分はインタビューイであるKの発話、その中で（ ）で示した部分はインタビューアである著者の発話、本文中の〔 〕で示した部分は発話データからの引用をそれぞれ意味している。

研究に先立ち、Kには調査内容を伝え、研究倫理に関する説明を行った上で、調査協力の承諾を得ている。また、本研究を公開する可能性があることもその際に確認している。

### 3. 分析

#### 3.1 「ネイティブの先生」としての役割

Kは中国の大学に赴任したが、赴任した機関ではKが唯一の日本人教師であり、赴任当初から自身を日本社会の代表と捉えざるを得ないような環境に置かれる。その一例として、赴任直後の同僚の中国人教師との担当科目に関する、以下のようなやりとりがある。

それを聞いた時に言語、日本語教育だったらいいですけど、古典文法とか自分の専門分野外の授業を教えるとなると。一回、「ちょっとできないと思うんですけど」と言った時に、まあ大丈夫ですよ。えーって思って。古典文法は教科書を買って、それに沿ってやりました。まあ高校ぐらいかな、高校の文法ぐらいのレベルだったので復習しながら。だからとりあえずネイティブの先生と何か話をしたいとか、ネイティブの先生から教えてもらいたい。もちろん教科の内容も重要ですけど、ネイティブの先生と話をする、接するということにまず重点を置いてるのかな。だから別にそこまで古典文法をちゃんと教えられなくても、という感じはちょっとあったかな。

赴任直後、担当科目を伝えられたKはその中に古典文法があることを知り驚き、「ちょっとできないと思うんですけど」という意思表示をしたところ、現地の先生からは「大丈夫ですよ」というあっさりした反応が返ってくる。ここでは、担当科目と日本人教師の関係性が見て取れ、Kは日本人の代表としてその科目を担当することが求められていると考えられる。また、現地の先生の反応からは「日本人なんだから何とかなる」という考えも汲み取れる。

結局、授業での自身の役割は、授業の内容よりも「ネイティブの先生と話をする、接するところ」にあることに気づき、Kは自身の専門ではない古典文法を正確に教えなければならないというプレッシャーから解放されている。

この語りからは、現地の先生からは、「何を、どのように教えるか」ということよりも、「学習者が日本人の先生と関わりを持つ」ことが求められていることを、直接的に言われたわけではないが、Kがそのことを感じ取っていることが窺える。

#### 3.2 “日本”に対する不足感

赴任後、Kは“日本”や“日本語”への不足感から、自身を日本の代表としては不十分な存在として

感じ、常にその不足感を補おうと努力していく。

それなりに色々知識は持っていないといけないかなと思って、やっぱり色々読みました。読んだっていうのはその文化的なものとか行事とか、色々読んで、あーなんかこれ知らなかったとか、足りないな、家ではとか。そういうのがちょっとあるんですよ、やっぱり。なんだろう。あるんですよ、意外と。それに気づかされるんですよ。

【中略】

あと言葉の言い回しとかもあるじゃないですか、家の中で習得する。それが足りない、ない、足りてないところも。

(日本語ってということですか)

日本語ですね。ていうことに気づいたのかな。おって思って。だからそこは足りてない、不足するところも出てくるのかなと思って。おーって思って、そっかそっかって思って。

このような言葉や言語に対する不足感は、日本語教育の勉強を始めてから感じていたが、実際に中国で教えるようになってから気づくことが多く、書籍やインターネットなどから情報を収集していた。Kの〔足りない〕や〔不足〕という語りからは、日本語や日本文化には完全な形があり、そのような状態に自身が至っていないという思いが汲み取れる。

なお、以下の語りにあるように、このような不足感をKが友人との会話の中で認識していることは興味深い。この友人は日本人の両親を持ち、日本国内で日本の教育を受けて育ち、小学校教師として働いている日本人である。

なんかいろいろ日本人の友達と話すとき、家ではそんなのやっていないなあとか。何でしょうね、ちょっとした行事とか習慣とか。例えば、お正月に何かやるとか、やっぱり知らないことも多いんですよ、七五三とか、やる時もあればやらない時もあるんですけど。やっぱり友達の話の聞くと、それやるんだ、やっぱりとかいうことがあるので、そこの部分がやっぱり一つないかな。何でしょう、半分ちょっとそこはあんまり代表はできてない、代表として語れないところがあるのかなって、あるかなと。

友人の家庭と自身の家庭の文化環境の異なりがKの不足感を浮かび上がらせている。このような不足感は〔(日本人の) 代表として語れないところがある〕ことと繋がっている。

### 3.3 半分しか出せないもどかしさ

Kが複数の言語文化環境で育ったことは授業を行う際にも影響を与えている。以下の語りからはKが意図的に自身のことを授業の話題に出さないようにしていることがわかる。

やっぱり、日本語の授業となるとそこはできるだけ出さないようにはしたいかなと。例えば、スペイン語ではねえとか、そういう自分のバックグラウンドをそこまで出さないようには、話題には出さないようにはしていました。

(出さないのはどうしてですか)

何でしょう。例えば、日本文化事情だと、やっぱり日本の文化と言うふうに限られるじゃないですか。で、そこで例えば、「私の家<sup>うち</sup>ではね」って言うと、違うんですよ、やっぱり。母親の文化が入っているの。だからちょっとそこは違うかなって。何でしょう、日本の文化を学びに来ているけれども、違う文化も混ぜるとちょっと良くはないかなと思って。

日本語の授業において、Kは、自身のバックグラウンドについては学習者に提示しないように心がけていた。それは、自身の家庭などのことを提示すると、日本の文化ではない母親の文化が混在してしまうからである。日本文化事情のような授業の場合、学習する対象は“日本文化”であり、違う文化のことを混ぜることは好ましくないとKは考えていた。

この語りからは、Kの中に“日本文化”というもののイメージが存在しており、それは自身が育ってきた文化とは異なるものであるとKが認識していることがわかる。そして、〔日本の文化を学びにきているけれども、違う文化も混ぜるとちょっと良くはない〕という語りからは、学習者に配慮しているKの姿勢が伝わってくる。つまり、典型的な“日本文化”を提示することこそが学習者のニーズに沿うものだとKは考えているのである。

しかし、自身のバックグラウンドを出せないことにはやりにくさも感じている。

たまにちょっとやりにくい時がありますね、何かを説明する時に、よく自分の家ではとか、やっぱり身近な例を出すんですよ。これは出せない、出せないと、あー、困ったなって。やっぱりそこは友達の家<sup>うち</sup>ではね、とか。父親の家<sup>うち</sup>では、別に自分の父親だからあれですけど、半分が紹介できないので、ちょっとなんか物足りない感じはしますけどね。

教師が身近な話題を取り上げることは学習者の関心を惹くことに繋がり、授業において頻繁に取り入れられるが、日本語母語話者教師が自分自身のことを提示することは、日本語学習者が関心を抱いている日本社会や文化、そして日本人を提示することとも直結しやすい。言語の背景にある社会や文化事情を知ることが言語学習において重要とされている。しかし、Kの場合、自身のことをそのまま提示することができず、授業では書籍やインターネット、そして友人から得た情報を提示することとなる。

このことについてKは、〔半分が紹介できないので、ちょっとなんか物足りない〕と感じている。この〔半分〕という言葉からは、Kが自身を構成する文化は“日本文化”ではないと感じていることが窺える。もう〔半分〕を提示できないことから生じる〔物足りない〕という気持ちは上述の不足感とも繋がるだろう。

このように、中国に赴任してからしばらくの間、Kは自身の背景や日本社会の多様性を示すことに対しては懐疑的であり、むしろ伏せるべきだと考えていた一方で、自身が足りないと感じる部分を必死に埋めるために努力をしていた。

### 3.4 日本人日本語教師としての葛藤

しかし、滞在期間が長くなるに従い、日本について知りたがる学生たちが、日本社会を単一族社会だと捉えていることが気になり始める。



一つ紹介した方が良いと思ったのは、今の日本社会で、単一民族じゃないですけど、やっぱりそう思う、海外、中国で教えた時にそう思っている学生がちょっと多かったんですよ。

〔やっぱり〕という言葉からは、Kは自分の学生たちが日本を単一民族社会だと捉えていることを以前から想定していたことが窺える。この想定は実際に中国に赴任し、日本語を教える中で、実感を伴ったものになっていった。そして、そのような学生たちに対して、何か伝えていった方がいいという気持ちが芽生えている。

日本ではそうだけど、今はちょっと、やっぱり時代によって違うよって話をしたんですよ。

(授業の中で?)

授業の中でも少ししたんですよ。そう、だから、もう一つ心がけたのはステレオタイプを崩したかったのは崩したかったんですよ、日本ってこういう国だと。ただ、そう、だから、日本では日本ではって聞かれたときに、その教科書とか伝統的な習慣はこうだけど、やっぱり時代とともに変わるからちょっと違うよとか、地域性もあるじゃないですか。だからその、日本は一つでは語れないと、一つその、まとめて一つのものとしては語れないよってのは言ったんですけど、それでもやっぱり自分のもう一つの部分は伏せてはいたんですよ。それはちょっと矛盾しているかもしれないですね。

Kは学生たちの期待に応えようとしながらも、ステレオタイプを崩したいという気持ちから、教科書や伝統的な習慣とは異なる日本についての話をしている。この授業は日本語の授業の中ではなく、文化や社会について学ぶ授業であるが、その中で、時代による違いの話をしたり、日本の社会問題について提示したりして、〔日本は一つでは語れない〕ことを伝えている。しかし、その一方で、〔自分のもう一つの部分は伏せていた〕ことからKの中の葛藤が窺える。

(実際かなりの人がいて、いるわけじゃないですか。それも多分日本社会の一つだと思うんですけど、そこを伏せるというのは日本語を教える時に典型的な日本というものを伝えた方が学生の期待に応えられるっていう気持ちが強いですか。)

その時は強かったかな。強かったんですけど、並行してやっぱり日本の社会のステレオタイプ、それも崩したいって言う気持ちもあったんですけどね。

別の葛藤は、典型的な“日本”の姿を伝えることによって「学習者の期待に応えたい」という気持ちと、日本社会に対するステレオタイプを崩したいという気持ちから生じている。このような葛藤は、必ずしも複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師のみが抱くものではない。高橋他(2012)では、海外の日本語教育において、日本語母語話者教師が自身の役割を「学習者の関心を引くため」「とりあえず日本人がいればいい」「客寄せパンダ」などの存在として自虐的に捉えていることが述べられている。このような捉え方からは固定的な役割に違和感を感じながらもそこから抜け出せない日本語母語話者教師の苦悩が窺えるが、Kの場合は、上述したような“日本”

や“日本人”に対する不足感があるため、その苦悩はまた違う意味合いを持っているものと考えられる。

### 3.5 提示への手応え

上記のような葛藤を抱きながらも、Kは学生のステレオタイプを崩したいという気持ちから、日本社会の問題や貧困問題、女性の貧困などについてのビデオを取り上げている。

例えば、日本社会の問題とか貧困問題とか女性の貧困とかについてのビデオを見せたりとかしたんですよ。そしたらこういう、日本ではこういう人もいるんだとか知らなかったとか。後は国際結婚とかミックスの人もいますよとかいうのを。授業ではやらなかったんです。その発表会とかがあったんですよ、別の発表する機会があって。

それまで、このような話題を授業で扱うことは避けていたKであったが、授業で取り上げたところ、学習者がそれを興味深く受け止めてくれたことにより、日本社会の複雑性を提示することへの手応えを感じている。

そして、自身と関係する〔国際結婚とかミックスの人〕のことについても、中国人日本語教師の友人の大学での講演会にて取り上げている。この講演会は日本語学科の学生に対して日本事情を紹介するもので、中国語の同時通訳を入れながら行われた。

なんか知り合いのお友達が別の大学で日本語を教えてたんですね。で、ちょっと呼ばれて、何か話をして欲しいと言われてたんですよ、何でもいいからと。そしたらまあ、自分のことについて話そうと、その時は。なんでそうなったのかはちょっと分からないんですけど、全然それが一番いいって言われて、そうそう、いろんな日本社会とか国籍とかについて話した。ちょっと知ってもらおうと思ったんですけど、それは授業外だからやりました。

しかし、〔授業外だからやりました〕という語りからもわかるように、このような自身と関わる話題については、最後まで自身の授業でそのことを取り上げることはなかった。これは、授業という日本人教師としての責任を伴う状況においては日本人として期待される役割を果たしたいという気持ちからではないだろうか。

一方で、他校で行った発表については、非常に反応がよく、提示への手応えを感じている。

色々コメントいただいて、やって良かったなと思いました。なんか、いろんな国籍とか、国際結婚したくなりましたっていう学生もいました。本当かなと思いつつながら。やっぱりそういう違うことを教えて、紹介して、学生も刺激とまではいかないんですけど、今までとは違うことを学んだっていうのはあったんで、それはやってよかったなあとと思って。

(反応はわりとポジティブなことが多かった?)

そうですね、全然ポジティブでした。まあ建前かどうかは分かりませんが、わりとポジティブでしたね。それは良かったです。

このような日本の中の多様性を伝えた時の、学生たちの反応はKが想像していたよりも好意的なものであり、「授業外であれば」という留保つきではあるが、今までとは異なる学生の学びに繋がるものとして、「教えても良いんだ」という実感に繋がっている。

#### 4. 考察

##### 4.1 葛藤はどうして生じたのか

Kの語りからは、海外の日本語教育現場で日本人教師に求められる「日本人性」は、その枠組みに当てはまらないKに、「日本は一つでは語れない」と思いながらも自身の背景については語れない、典型的な“日本”や“日本文化”を提示することで学習者の期待に応えたいが学習者のステレオタイプを崩したい、という2つの葛藤をもたらしていることがわかった。もちろんこのような「日本人性」は、複数の言語文化環境で育った日本人日本語教師にのみ関係するものではない。Kの「[他の人だってわからない]」という実感が示すように、誰もが“日本”や“日本文化”に関する全てに通じているわけではない。その一方で、Kが抱く不足感は、日本人の両親を持ち、日本国内で育った日本人日本語教師が抱くものとは明らかに異なる。[半分しか代表できない]という言葉は、Kが日本人日本語教師として中国の日本語教育の現場に携わり、そこで痛感した“日本人”としての不足感を如実に表している。メキシコと日本の文化が混ざり合った家庭環境で育ったKにとっては、何が日本的なのか、明確に区別することは難しい。

上述したように、Kは日本の企業に勤務した経験を持ち、大学院まで修了している。日本語の使用に関しては全く問題ない。それにも関わらず、日本語を教える際には上述のような不安を抱いている。これは、日本語教育の中で捉えられる“日本”や“日本人”と実際の状況が乖離する中で、日本語教育においては前者が後者に優先される構造が暗黙的に作り出されていると言える。そのため、Kはその構造において常に不足感を抱くこととなったのである。

##### 4.2 “日本”を再生産する日本語教育

Kは、赴任した当初、自分のような複数の言語文化環境で育った日本人がいることなど、日本社会における多様性については学習者に提示する必要はなく、典型的な“日本”について示した方が良いと考えている。これはKが、自身の背景とは異なる“日本”というものについて、何らかのイメージを想起しており、その“日本”を日本社会における主たるもの、ないしは優性なものとして捉えていることを意味する。日本人として育ってきたKがどうして自身のことを堂々と語るができないのか。そこには、十全たる文化というものが存在しているという観念を背景にしなながら、日本語教育が“日本”を扱う学問であるという暗黙の了解があるからではないだろうか。このことは、日本語教育が、ともすれば、“日本”や“日本人”というものを再生産するという機能を有しているとも言える。そして、それは「学習者の期待」という大義名分のもとに正当化されていく。そうして、本来、境界性が曖昧であるはずの“日本”“日本人”というものが一定の枠にはめ込まれていく。

特に、海外の日本語教育においてはリソースが限られており、日本から来た日本人日本語教師には「代表性」が求められるため、そのような力がより強く働く。Kの場合、ステレオタイプを崩したいという自身の思いや、それを実現する場があったことから、次第に「日本の中の多様性



を示しても良い」という気持ちに変化しているものの、全ての教師がこのような意識を持つとは限らない。

日本語母語話者である著者も、これまで国内外で日本語教育に携わってきたが、説明の際、特に初級の授業においては、学習者の混乱を避けるため、典型的な事象を例にとり説明を行ってきた。振り返ってみると、このような意識は教師養成段階から徐々に培われてきたように思う。「学習者にわかりやすく教える」ということは裏を返せば、物事を簡略化、一般化して伝えるということでもある。また、教師が使用するテキストも典型的な“日本”や“日本語”の再生産化に貢献する可能性を秘めている。近年では、多様性を取り上げるものやナラティブを扱うテキストなども出てきているものの、そのような「テキストが作り出す世界」が言語教育に与える影響というのは看過できない。さらに、学習者のニーズを重視する考えなども教師の意識を知らず知らずのうちに拘束しているのではないだろうか。つまり、このような考えにおいては、学習者が求めることよりも教師の主義や主張を優先することは憚られてしまう。そうすると、Kのように自身のような多様な背景を持った人々が日本にいるということを伝えたいという意識を有していたとしても、それを自分本位だと捉え、気持ちを抑え込んでしまうことはあり得ることである。もちろん、これらは外国語教育の発展の歴史の中で培われてきた知見でもあり、全てを否定するつもりは毛頭ない。しかし、木村(1991)で取り上げられているように、日本語教育は植民地期、台湾や朝鮮における皇民化政策、東南アジア地域における統治政策等に利用された。言語の教育は時として政治的なイデオロギーと結びつき、暴力性を持ちうるという側面があることは忘れてはなるまい。その意味では、Kのような人々が抱く葛藤に目を向け、そこで出てきたものを日本語教育に還元していく行為は、“日本”“日本人”というものを解体していく試みとも言えるのではないだろうか。それは他者との境界の設定や同一化を究極の目標とする固定的、静態的な「国民国家のイデオロギー」(西川、2001、p.20)から我々が脱する契機となりうる。

## 5. まとめ

本研究によって、複数の言語文化環境で育った日本語教師Kが海外の日本語教育現場において、どのように自身の文化を提示することと向き合っていたか、その意識の変容を示すことができた。中国の大学に日本人日本語教師として赴任したKは当初、できるだけ“日本人”として振る舞おうとし、“日本”や“日本人”とは関係のない自身の話はしないようにしていた。一方で、Kは“日本人”としての不足感を感じ、その部分を埋めようとしている。その後、授業の中で学生たちが日本に対するステレオタイプを持っているということを実感することにより、次第に日本が多様であることを示していくようになる。そういう中でも自身と関わることを語ることは自身の授業の中では行わなかったが、帰国前、友人の大学の学生に対しては自身と関わる国際結婚やミックスの話を取り上げ、講演を行なった。このようなKの変容には内的、外的要因が強く影響していると思われるが、その点については本稿では明らかにすることはできなかった。今後更なるインタビューを行っていくことで、分析を深めていきたい。

日本社会の多様化に伴い、今後もKのような複雑な背景を持つ日本語教師は増加していくものと思われる。また、日本に長期に滞在する日本語非母語話者教師もKが抱いた不足感と近い感情を抱くかもしれない。しかし、彼ら／彼女らのような教師の存在は日本語教育をより豊かなもの

へと変えていく可能性も秘めている。日本語母語話者と非母語話者という二項対立的な図式に収まらない人々のナラティブが、これまでの日本語教育が捉えてこなかった視点を提供してくれる。そして、「一個人としての特徴をもった教師の多様性を認める」(高橋, 2015, p.62) ことが、日本語教育が、多様な価値観を尊重し、多文化共生のプラットフォームとなっていくために求められるのではないだろうか。

本研究が日本語教育が孕んでいる問題を考えていく上での一つの投石となれば幸いである。

## 謝辞

インタビューに快く応じてくださったKさん、貴重なご助言をくださった名古屋外国語大学の近藤行人先生、神戸学院大学の香月裕介先生に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1 本稿では、“”で括らない日本は地理的な意味で用い、日本人は「日本国籍を有する者」と捉えている。一方、“”で括っている用語(“日本”や“日本人”など)を、二項対立的に捉えられる典型的な日本人や日本などを意味する概念として扱う。なお、本研究の調査協力者であるKはメキシコと日本の二重国籍を有しているが、日本国内においては日本人として扱われており、本稿でもそのように見なす。
- 2 他の文献では「日本語ネイティブ教師」という言葉が用いられることも多い。これに対して、日本語を母語としない教師には「日本語非母語話者教師」「日本語ノンネイティブ教師」という言葉が用いられている。これに関連して、田中(2013)や嶋津(2016)は、「母語話者」「非母語話者」という概念は、それぞれ「ネイティブ」「ノンネイティブ」の下位概念にあたり、厳密には意味が異なることを指摘しており、日本語教育という文脈において両者が混同されている点に言及している。本稿においては、引用文献中の用語は引用先の言葉をそのまま使用するが、それ以外の部分に関しては、「日本語母語話者教師」「日本語非母語話者教師」という用語を「日本語ネイティブ教師」「日本語ノンネイティブ教師」と同義として用いる。
- 3 国際交流基金の調査では「日本語母語教師」という言葉が当てられているが、国際交流基金(2020)には「日本語を母語とし、日本語を教えている教師」という定義がされているため、本稿では上述の「日本語母語話者教師」と同義と捉え、読者の混乱を避けるため表記を統一している。
- 4 日本語教育に関する用語をまとめた『研究社 日本語教育辞典』(近藤・小森 2012)は、ビリーフ(信念/beliefs)を「学習者や教師が言語や言語学習に関して抱いている個人的な信念や見解」(p.93)と定義している。
- 5 代表的な初級日本語テキストである『みんなの日本語』の初版では、第7課で「日本人ははしでごはんを食べます。」(p.58)という文が提示されていた。この文は2012年に改訂された第2版では「わたしははしでごはんを食べます。」(p.58)に修正されている。

## 参考文献

有田佳代子(2016)『日本語教師の「葛藤」—構造的拘束力と主体的調整のありよう』ココ出版  
石井恵理子(1996)「非母語話者教師の役割」『日本語学』2月号, Vol.15, 明治書院, pp.87-94

- 小澤伊久美・丸山千歌 (2011)「ある若手日本語教師の海外派遣前後の意識の変容—非母語話者日本語教師との協働に関するPAC分析インタビューより—」『ICU日本語教育研究』, pp.33-53, 国際基督教大学日本語教育研究センター
- カイザー, シュテファン (1995)「ノンネイティブ教師の役割—異文化間教育の現場としての日本語教室を目指して—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10, pp.95-106, 筑波大学留学生センター
- 木村宗男編『講座日本語と日本語教育15 日本語教育の歴史』明治書院
- 久保田美子 (2017)「ノンネイティブ日本語教師のピリーフと学習経験—2004・2005年度と2014・2015年度の量的調査結果の比較—」『国際交流基金日本語教育紀要』13, pp.7-22, 国際交流基金
- 国際交流基金 (2020)『海外の日本語教育の現状 2018年度日本語教育機関調査より』国際交流基金
- 小熊英二 (1995)『単一民族神話の起源—〈日本人〉の自画像の系譜』新曜社
- 近藤安月子・小森和子 (2012)『研究社 日本語教育辞典』研究社
- 嶋津百代 (2016)「日本語「ノンネイティブ」教師の専門性とアイデンティティに関する一考察」『関西大学外国語学部紀要』14, pp.33-46, 関西大学外国語学部
- スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語 初級 I 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (2012)『みんなの日本語 初級 I 第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- 高橋雅子 (2015)「国内の日本語教育における非母語話者教師に関する考察—多文化共生社会における語学教師の多様性を問う—」『日本語教育実践研究』2, pp.104-113, 立教日本語教育実践学会
- 高橋雅子・門脇薫・辛銀眞・松尾憲暁・中山英治 (2012)「教師間協働の課題と提案—協働経験を持つ教師の内省から—」『日本語・日本語教育』創刊号, pp.63-75, 立教大学日本語教育センター
- 田中里奈 (2013)「日本語教育における「ネイティブ」／「ノンネイティブ」概念—言語学研究および言語教育における関連文献のレビューから—」『言語文化教育研究』11, pp.95-111, 言語文化教育研究会
- 陳良慶 (2012)「教育実習を通じて見えてきた非母語話者日本語教師の利点」『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』3, pp.206-230, 国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域
- 中井雅也 (2009)「タイの高校で求められる日本人日本語教師像—学生とタイ人教師の観点から—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』6, pp.43-52, 国際交流基金バンコク日本文化センター
- 西川長夫 (2001)『増補 国境の越え方—国民国家論序説』平凡社
- 平畑奈美 (2008)「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割—母語話者性と日本人性の視点から—」『世界の日本語教育』18, pp.1-19, 国際交流基金
- 平畑奈美 (2010)「海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化—海外教育経験を持

つ日本人日本語教師への質問紙調査から一」『早稲田日本語教育学』5, pp.15-29, 早稲田大学大学院日本語教育研究科

星摩美 (2016)「韓国中等教育日本語教師のビリーフの変化に関する研究—因子分析による横断的变化の考察—」『金沢大学留学生センター紀要』19, pp.37-55, 金沢大学留学生センター

本名信行・岡本佐智子 (2000)「アジアにおける日本語教育の今日的課題」本名信行・岡本佐智子編『アジアにおける日本語教育』三修社, pp.9-32

松尾憲暁・香月裕介 (2018)「タイの日本語教育現場における日本人教師の「情報共有」の姿勢の変容—「正統的周辺参加」論を手がかりに—」中山英治 (2018)『タイの教師間協働の実践的検証と協働実践を促進するネットワーク構築に関する基礎研究』平成26～29年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書, pp.65-81

# 明治の地芝居の一側面

— 『岐阜日日新聞』郡上関連記事を手掛かりに—

One aspect of *Ji-shibai* (Kabuki performed by local people) in Meiji era:  
Some facts which newspaper articles about Gujo show

土谷桃子

## 要旨：

筆者は先に、明治29年（1896）までの『岐阜日日新聞』に掲載された芝居関係の記事を抽出したが、その中から岐阜県郡上地域における地芝居関連の17記事を取り出し、今後の地芝居研究にどのように活用可能か試行した。その結果、地芝居と社会状況との関連、芝居上演に至るまでの手続き、他地域の地芝居団体との交流等のポイントが指摘できた。よりの確な考察のためには、明治30年（1897）以降の新聞記事の調査が急務であると認識した。

## 1. はじめに

岐阜地域は、土地の人々が演じる地芝居（岐阜地域では「地歌舞伎」と称する場合もある<sup>1)</sup>）が盛んな地域である<sup>2)</sup>。筆者は先に、『岐阜日日新聞』（明治14年（1881）2月19日創刊）の明治29年（1896）までの紙面から岐阜地域の芝居関連の記事を抽出し、「岐阜地域芝居興行記録一覧稿」（JSPS科研費25370213助成調査成果、2016.3）を作成し、さらに「岐阜の地芝居の足跡 — 『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉猟から—」（『岐阜大学留学生センター紀要2017』2018.7）を著した。同稿では記事の全般的な傾向を示し、興味深い記事をいくつか紹介した。今回の研究ノートでは、蓄積した新聞記事データをどう活用するかを試行する。試行に当たっては、研究のみならず留学生の日本文化体験や地域貢献活動で多くご協力をいただいている岐阜県郡上地域に焦点を当てることにした。

## 2. 郡上地域の地芝居

### 2.1 現在の郡上市の地芝居

郡上の芝居の起源として、明和年間（1764～1771）に青山幸道（郡上藩主青山家初代、1725～1779）が江戸歌舞伎を呼び、小野の八幡神社境内に小屋掛けして一般公開したことが指摘されている<sup>3)</sup>。天保11年（1840）に和良遠藤下洞陣屋代官を勤めた池戸甚左衛門が著した『郷中盛衰記』には、「祭り狂言ハは貢間、東野古し両村とも百年余りニも成べし、寛政、享和、文化の頃ハ狂言のなき祭りなし」「祭り狂言の始りハ我等世話致す、寛政時代なり」とある<sup>4)</sup>。貢間と東野は、それぞれ現郡上市八幡町入間、同市和良町三庫の範囲内である。寛政（1789～1800）、享和（1801～1803）、文化（1804～1817）には「狂言のなき祭りなし」というほどの芝居熱が、2.2で述べる明治期の郡上にも息づいていたのである。



現在郡上市では、「高雄歌舞伎」と「気良歌舞伎」の2団体が精力的に活動している。高雄歌舞伎は<sup>5)</sup>、市島高雄神社（郡上市八幡町市島）の拝殿を舞台としていたもので、同拝殿は延享（1744～1747）以降に成立し、明和5年（1768）に修理されていることから、その頃から拝殿で催されたと考えられている。もともとは「市島歌舞伎」と称され、のちに高雄歌舞伎に改称されたという。明治以降も地芝居は演じられ続け、大正期から昭和初期が全盛であった。高雄神社の拝殿舞台は、天保3年（1832）に再築されたものが現存するが、芝居に用いたのは1985年が最後で、その後は祭りの神事に使われるのみとのことである。現在高雄歌舞伎の公演は、郡上市の口明方小学校体育館で毎年10月に行われている。

気良歌舞伎は、郡上市明宝気良地区の団体で、1988年に途絶えてしまったものが2005年に再興された。高雄歌舞伎の力添えを得ながら、再興に尽力した若者たちが役者として活躍している。毎年9月に明宝コミュニティーセンターで気良白山神社祭礼奉納定期公演が行われている。

歴史ある高雄歌舞伎と若さ溢れる気良歌舞伎の明るく和やかな競演は好ましい。岐阜県は、2020年1月から7月まで「清流の国ぎふ 2020地歌舞伎勢揃い公演」を開催し、毎月岐阜市の清流文化プラザで県内29地芝居団体が次々と芝居を披露する予定であった。高雄歌舞伎と気良歌舞伎の公演は6月7日（日）に予定され、せっかくだから同じ演目をとということで、両者で『忠臣蔵』を選んだ。気良歌舞伎が五段目（鉄砲渡しの場・二つ玉の場）と六段目（与市兵衛内勘平腹切の場）、高雄歌舞伎が七段目（祇園一力茶屋の場）である。郡上としての一体感が感じられる<sup>6)</sup>。

郡上の地芝居の特徴は、芝居を仕上げていく過程にもある。地芝居が盛んな東濃地区の中津川市や恵那市では、芝居の指導を専門にする振付師を頼んで稽古を積み、芝居を作り上げる。それに対し郡上では、以前は振付師を外部から呼んでいたが、現在は団体内の経験のあるメンバーが振付をしており、気良歌舞伎の指導には高雄歌舞伎のベテランが協力している。自分たちで指導も技術もつないでいくという文化も、郡上の地芝居の一体感を生み出している要因であろう。

## 2.2 「岐阜日日新聞」明治20～29年の郡上市における地芝居関連記事

現在2団体が活動している郡上地域の地芝居であるが、明治期の様相を明確に知ることは難しい。本稿では、時事を反映する新聞という媒体から分かることを指摘してみる。当然のことながら、新聞は万能ではなく、新聞がすべての事実を拾っているわけでもないし、誤りがないわけでもない。しかし、手掛かりとしては有用であると考ええる。

調査対象とした『岐阜日日新聞』は明治14年（1881）創刊で、29年（1896）までを調査したところ、地芝居関連の記事は344点あった。そのうち、郡上と明記されている記事は、20年（1887）が初出で、全17記事あった。かなり限られた数と言わざるをえないが、パイロットスタディとして許されたい。各記事と、そこからの推測・考察を矢印（⇒）以下に示した。記事内の振り仮名の取捨選択、空白の挿入は筆者による。

### ① 明治20年（1887）2月24日

●郡上郡通信 ○素人芝居 目下世間一般に不景気を挽回して好景気を現したる加減にや本郡八幡町近在に於ては素人芝居が流行し 見物人もかなり有るよし

⇒ 郡上の地芝居についての初出記事である。『岐阜日日新聞』には、本記事のように「郡上郡通信」（①②）、「郡上郡八幡通信」（③⑤）や「岐阜通信」、「大垣通信」、「恵那郡通信」等、地域に

特化した記事群が不定期に認められる。その地域の情報を重点的に送信する専門スタッフもしくは有志がいたのだろう。

② 明治24年(1891) 6月23日

●郡上郡通信 ○素人芝居の準備 本年麦作の豊饒なりしと 蚕況の良好なるとに依りて大いに人気立ち 昨年迄の苦しさを忘れて早くも素人芝居などを興行せんと 専ら計画し居る村落もありと聞けり 嘆ずべき至りなり

⇒ ①からも分かるが、景気の良し悪しは娯楽を左右する。麦作については、本記事の直前の郡上郡通信記事に「●麦作 十数年来未だ曾て無き所の豊作にて 三四割方の増収もありしといふ」とあり、稀にみる豊作であったことが分かる。また、明治初期の郡上の養蚕については、「武儀・郡上郡では最も生産価額の高いのがそれぞれ紙、繭・生糸類で、米の生産価額をもしのいでいる。このような特定の特産物が米を凌駕している郡は、美濃には、武儀・郡上両郡以外には存在しない。」<sup>7)</sup>と述べられているように、同地の経済活動の中心を担うものであったことが分かる。

養蚕と村芝居舞台の関係については、先行研究に指摘がある。守屋氏は、村芝居の舞台郡の所在が「平野部には少なく、その周辺あるいは山間・海浜といった辺鄙な地帯に集中的に分布しているのが目立つ。」と述べ、さらに「その分布が濃厚なのは、養蚕・製糸を主要な商品生産物とする関東・中部・山陰などの、いわゆる中間地帯に限定される。」と指摘している<sup>8)</sup>。養蚕業により現金収入の道筋ができ、かといって裕福な者と貧困な者が断絶するほどの経済格差が生じなかったことが、これらの地域の特色である。経済的な余裕に加えて地芝居の母体となる地域共同体が維持されていたことが、郡上ひいては岐阜地域の地芝居の隆盛をもたらしたと考えられる。

ただ、この記事の最後に「嘆ずべき至りなり」とあるように、基本的に素人芝居は困ったものだという姿勢が同紙には一貫して見られる。

③ 明治24年(1891) 8月13日

●郡上郡八幡町通信(十一日発) ○素人芝居 下洞村近傍にては目下素人芝居の流行甚しく 動もすれば学齡児童も厭ひなく俳優に加ふるに依り 志あるものは大いに痛嘆し居れり  
⇒ 現郡上市和良町下洞。②には「蚕況の良好」とあったが、本記事直前には「●繭の収穫 和良地方は昨年に比し多量の増収たるも 何分生糸下値につき随分不景気なり」とある。供給過剰で却って値が下がる状況にありつつも、やはり芝居をせずにはいられない。

④ 明治24年(1891) 8月15日

●村芝居流行 郡上郡宮地村辺にては 例の村芝居熱に浮され 中には教育盛りの子供にして 此の熱に冒されんとするさへありと お歙祭りと一對の馬鹿者 何したら此根絶しが出来るか 嘆々々又た嘆  
⇒ 現郡上市和良町宮地。村芝居と対にされている「お歙祭り」であるが、岐阜近隣でその名称に該当するものには2種類あったようである。ひとつは、可児市土田の白髭神社で現在も催されているお歙祭りである<sup>9)</sup>。毎年3月11日に行われ、農耕作業の模倣をすることやミニチュアの歙を奉納する点が特色であるという。もうひとつは、伊勢信仰の一種である「お歙様」である。60年に一度伊勢神宮から到来した木製の歙を分霊として祀るもので、江戸年間の郡上への到来は6

回あった<sup>10)</sup>。本記事の「お欽祭り」は、前者であれば可見に現存するのと同様の祭りが郡上にもあったと考えねばならず、後者であれば明治以降にも祭りが行われていたと考えなければならぬ。いずれが該当するのか、もしくはいずれでもないのかは判然としない。ただ、後者のお欽祭りについては、『続 岐阜県の祭り』に「本来の意義を忘れ全くの馬鹿騒ぎにといえるほどになったのでした。／各地で余りの馬鹿騒ぎが続出したので笠松代官はこれを禁止しましたが、郡上藩は黙認したらしく文久までつづいたのでした。」(p.241)とあり、本記事の「馬鹿者」という表現と通じるものがある。

#### ⑤ 明治24年(1891) 8月21日

●郡上郡八幡通信(十九日発) ○村芝居にも壮士俳優出来る 東部なる或る会員の壮士三名は 彼の狂人めきたる村芝居の催はし其の土地に起るや 川上音次郎の喝采を羨みてか俄かに俳優になりたくなり 一番村芝居の壮士俳優として全郡の人気を吸集せんものとの字の眉毛を剃るやら八の字の髻を剃るやらで 何か裁判所公判廷様のものでも演じ 得意の雄弁を揮ひて法律を説き 台詞なく倣草なくして見物に感動を与へる団洲をもアツと言して見せんと 蓋開前から鼻高々として入費の百二三十円も投じて 悉皆準備も出来たところ今度の暴風にて小家も舞台も 刺 離骨敗、手の附られぬ有様なりたれば 三名の壮士村俳優の落胆も嘸かしとお察し申す

⇒ 壮士芝居は、自由民権運動の壮士が思想宣伝を目的として行った演劇で、明治20年代に盛んに行われた。裁判や公判の場面では、演技より演説が重視される側面もあった。川上音二郎(1864～1911)はその主たる役者である。「団洲」は九代目市川團十郎(1838～1903)である。彼は、歌舞伎の荒唐無稽さを排除し史実を重んじ風俗を忠実に再現する、いわゆる「活歴」という演出様式を取ったが、自然さを重視するため台詞も動きも少なめであった。本記事の「台詞なく倣草なくして見物に感動を与へる団洲」はこの点を踏まえている。川上音二郎、団洲という名前が、注釈なしに岐阜の読者に理解されていたことは興味深い。

この芝居を中止に追い込んだ暴風雨については、同日の郡上郡八幡町通信に「●暴風全郡概況 去る十六日の暴風雨は思ひの外被害少なく 今全郡の概況比較を与れば左の如し(略)、飛騨国吉城郡通信に「●十六日の暴風 去る十六日の暴風は当地方にても中々激しく 午後七時二十分より吹起り 雨さへ強く降注ぎて 翌十七日午前六時稍々歇みたるが(略)」とあり、「小家も舞台も刺離骨敗」(刺は嘲の誤りか)であったことが頷ける。

#### ⑥ 明治24年(1891) 11月12日

●村芝居 時節柄少しは謹んで貰ひたしと云つた処が 同域同情の念なき奴輩の耳には入るまじく 所謂縁なき衆生は度しがたけれど 四千万の我同輩中 否な百万の我が県民過半は劇烈なる地震に遭遇し 家財を蕩尽して飢寒を訴へ 父母を喪ふて余震中に白骨を求め 妻子を傷つけて塵烟中手当の行届かざるを歎ずるものある今日に当り 幸ひ己れ震災を免れたればとて 馬鹿へしき田舎芝居に狂奔するとは何事ぞ 聞く郡上郡土京村及び飛騨国益田郡竹原村大字乗政、同郡三郷村大字萩原、同郡下呂村大字小川及び森、同郡中原村大字保井戸及び門和佐に於ては 近々田舎芝居を興行せんとすと 是れ等の奴輩に關つて幾回無情、浮薄、無感覺、無神経等の語を費すも要なき業なれば 只馬鹿の一語を以つて評し去らん



苟りにも之れを口惜しと思はゞ 暫しなりとも田舎芝居を止めよ

⇒ 明治24年(1891)10月28日に美濃・尾張は濃尾大地震に襲われた。マグニチュード8程度と推定され、死者は7千人を超えた。この地震からわずか2週間後であるにも関わらず、記事内の7ヶ所で村芝居が予定されている。記者と同様不謹慎に思うと同時に、芝居にかける熱意に感動に近いものも覚える。記事冒頭の「同域同情」は「異域同情」から作語されたものであろう。郡上郡土京村は、現郡上市和良町土京である。

⑦ 明治24年(1891)12月16日

●馬鹿者 郡上郡大原村福野組の馬鹿者否若者は 県民の不幸を余所に見て村芝居を為し去る十日大入三日間興行したるは余りの仕方に就き 存分筆誅をとの投書ありたり

⇒ 現郡上市美並町大原・同町白山福野。濃尾地震の被害にも関わらず芝居に熱中する若者への批判の投書である。この時期に芝居に興じていたのは郡上の若者だけではなく、前15日には「気楽な人々」という題で、加茂郡久田見村(現加茂郡八百津町久田見)でも一度立ち消えになったはずの芝居を若者たちが興行中だという記事がある。

⑧ 明治27年(1894)8月10日

●芝居興行を遠慮す 郡上郡小那比村と云ふは 同郡中にて比類なき素人芝居の好きな村にして 明治十二年以来八月一日の村社祭典には一年も休まず興行し 其の間年の豊凶を問はず 其筋の許可を論ぜず 無茶に興行して処罰を受けしことも数度あるよしなるが 本年は国家の一大事と聞き何より好きな芝居を十七年目に休み 兵員優待軍資金献納の募集に応じ 其日暮しの赤貧者までが応分の献金を為さんと云ふに至り 若干金を募り得たるよし

⇒ 現郡上市八幡町小那比。「明治十二年以来八月一日の村社祭典には一年も休まず興行」とあるが、岐阜県神社庁公式ホームページ(<http://www.gifu-jinjacho.jp/>)によると、同地区には7社が現存する(熊野、石剣、熊野、八幡、熊野、神明、神明)。このうち、8月1日に祭礼を催していたのは、小那比熊野神社大明神(八幡町小那比字宮ヶ洞)である<sup>11)</sup>。祭礼や芝居を欠かさず行う小那比であるが、「国家の一大事」即ち日清戦争に際しては芝居を休んでいる。同年11月2日には、素人芝居や寄合相撲等の興行が盛んな西濃大野郡でも「目下軍国多事の折柄」であるため興行しないという記事がある。⑥⑦の濃尾地震との対比が興味深い。

⑨ 明治28年(1895)7月30日

●素人芝居 郡上郡にては本年 春 蚕しゅんさんの結果好く 農家にして養蚕の為に得たる利潤少なからざりし故か 農家の景気頗る宜く 同郡和良筋にて小那比村にて二組 差山(ママ)村夕谷組 洲河村 入間村貢間区 和良村宮代、宮地、上澤、下澤等各区の若者は素人芝居を演ぜんとて 既に稽古に取掛りたるが 尚ほ其の他にも若者が稽古を始めんと目論見居るよし

⇒ 地名が細かく示されており、芝居がいかなる地域ごとに行われていたのかを知る手掛かりになる。養蚕の好況が芝居を後押しする。「差山」は「美山」の誤りと考えられ、それぞれは、現郡上市八幡町美山、同八幡町洲河、同八幡町入間、同和良町宮代、同和良町宮地、同和良町沢である。

⑩ 明治28年（1895）8月21日

●素人芝居 西南濃の水害に引替え 東濃地方は概して豊作の模様にて農家の景気宜しく郡上郡にては例の村芝居にて目を突くほどの有様なるよし 即ち近日の分を記せば 和良村大字上澤は十四日より、入間村は十六日より、弓掛村は十八日より 何れも晴天三日間の興行、続ひて宮代村、入間村字大洞、其の他にも順次興行する趣なり

⇒ ⑨に挙げられた地域が再掲されている。新出の弓掛村は、現下呂市金山町弓掛。岐阜県は古来水害に悩まされてきた地域である。『岐阜県史 通史編 近代下』の「洪水略年表」によると<sup>12)</sup>、この年7月30日に洪水が発生している。次の⑪も同じ水害である。

⑪ 明治28年（1895）8月24日

●素人芝居 西濃では水入がしたとか堤防が切れたとか または溜り水が退かずして稲が腐つたと云つて泣て居り 征台軍は百二十度以上の暑熱を侵して忠汗を絞り 土民の頑迷に苦しみ居る折柄 狂気染みた真似をして素人芝居に有頂天となるは誉られぬ事共なり 斯る用費があらば 恤兵の資に供する事こそよけれ 此の誉られぬ連中は東濃に地方に多くありて郡上郡にても和良村字上澤は去る十四日より三日 入間村は同十七日より三日 和良村宮代は同二十日より三日 八幡町は同二十日より六日間 若い衆連が素人芝居を興行し また稽古中なるは 同郡小那比村作道 洲河村 和良村田平外数ヶ所なりとイヤハヤ

⇒ ⑩と同じく水害への言及がある。「征台軍」は、日清戦争後の台湾平定のために派遣された近衛師団のことである（師団長北白川宮能久親王）。これらの国難にも関わらず、既出の各地に加え、現郡上市八幡町小那比作道、和田町三庫田平でも芝居の準備が進められている。

⑫ 明治28年（1895）9月11日

●若い衆の落胆 二百十日も二百二十日の厄日も無難に過ぎて 米の出来は不十分ながら本年も先づ八九分の作 彼岸過ぎに水田の跡口を切り落し稲刈り迄は農家暫らく隙など云ふ所から 東濃から北濃飛騨地方へ掛けて 何所の村の若い衆も素人芝居を企て 二三人寄り集ると芝居嘶し許り オイ吉イ 何ふじやろうそろへ芝居の時候に成つて来たのう 己去去年の祭り狂言に忠臣蔵の狸の角兵衛と 扇屋熊谷の姉輪平次 見たよふな馬鹿な役を貰つて味噌を付けたが 神殿の勘太の野郎は早野寛平に三代記の三浦を演りやアがつて 村中の阿魔つちヨを撫で廻はしやアがつたのが癪に障るが 手前はまだお軽に時姫なんと云ふ女形で当てたが 今年が一番己等目立て、良い役を取つて遣ろうじや無いか 又鐵公が下手な癖に芝居か ウン去年よりは勉強して見せるは 虎に熊 どうふじや常設委員様の所へ行つて願つて見よふじや無いか 皆な一所に來いと 打ち連れ立つて常設委員とか区長とか総代とか云ふ家へ行き 頼んで来ては稽古に掛り大根の陳列会を開くが 中に郡上郡地方も度々本紙に掲ぐるが如く 各村至る所で村芝居の相談が煮へ立ち 彼方でも此方でも芝居へと八釜しく云ふにぞ 和良村大字澤の若連中も隣り村が演つて澤が演らぬと云ふは面目無いと 同じく協議を纏めて武儀郡関町より師匠を雇ひ来たり 稽古に掛ると云ふ段になりて同郡長より各村長へ向つて注意したる其の儘を村長が若者へ通じ 懇々説諭しけるに若者連一同落胆したが 郡長様や村長様の御説諭に背く事は出来んとて 一時見合せる事にして師匠を帰したりと 此所若い衆大出来へ

⇒ この記事からは演目と実施に係る関係者の一片を知ることができる。演目については、記事内に記された役名から、『仮名手本忠臣蔵』（狸の角兵衛：六段目に登場する獵師・可笑しみのある役、早野寛平：塩治判官近臣、お軽：勘平の恋人）、『扇屋熊谷（源平魁躑躅二段目切）』（姉輪平治：熊谷直実に投げられる道化役）、『鎌倉三代記』（三浦（三浦之助義村）：京方の武将、時姫：三浦の恋人・北条時政の娘）の三演目が判明する。若者たちが事前に話を通す必要のある者には常設委員・区長・総代があり、若者に苦言を呈するのは郡長・村長である。郡長と村長からの注意によって断念はしたが、武儀郡関町（現岐阜県関市）から師匠を呼んでいることは注目される。同日紙面の「村芝居」という別記事には、益田郡中原村和佐区（現下呂市中原区和佐）は村芝居に「中村秀蔵とか云ふ師匠を日当一圓五十銭にて頼み来り」とあり、師匠を他所から呼ぶのは珍しいことではなかったと推測される。

⑬ 明治28年（1895）9月12日

●郡上郡の芝居一東 郡上郡大間見村にては 去六日より壮士芝居興行、洲河村にては八日より素人芝居興行、白山村上荊安組は目下稽古中、西乙原村は旧盆に興行する筈なりしも赤痢病流行の為め一時中止

⇒ 現郡上市大和町大間見、同八幡町洲河、同美並町白山、同八幡町西乙原。記事中の赤痢は、明治20年代に大流行する。『岐阜県史 通史編 近代下』の「赤痢大流行」によると<sup>13)</sup>、岐阜県は明治26年（1893）、全国的な赤痢の爆発的発生・流行に巻き込まれ、4,117名もの患者が発生した。27・28年は小康状態を保ったが、29年に再度大発生し患者は5,502名に達した。これらの数値は岐阜県総人口の4～5%に当たるといふ。しかし⑭以下にあるように、赤痢の流行にも関わらず芝居に熱を上げる人々も多かったようである。

⑭ 明治28年（1895）9月18日

●素人芝居 東濃名物村芝居は昨今盛んに催はし至る所演つて居るが 中にも土岐、郡上、等は最も甚しき由 其の他可児、恵那、武儀、の各郡及び飛騨地方も同様にて 其の一二を挙げれば（筆者：郡上以外略）

○郡上郡和良筋の 各村は一村に二組乃至三組宛稽古に取り掛り居れり

⇒ 地芝居が最も盛んであると目される東濃とともに郡上が挙がっている。

⑮ 明治28年（1895）9月26日

●振り付けは巡査 郡上郡とのみで村名は聞き漏らしたが 某村内の若者連が素人芝居を興行すると云ふ相談が纏まり 振り付を頼んで稽古に取り掛つた処が 其の村の近傍に駐在する巡査某が其の稽古を見に来合せ アノ振りは間違つて居るとか 此のタテは使ひ場が違ふとか小言を並らべ種々講釈をするに 振付師も兜を脱ぎ お役人様のお玄人には振付感心（ママ）な仕ります 却々以て未熟な拙者輩の及ぶ所では御座いません 斯ふ申せば甚だ失礼ながら お役人様には余程お芝居が御執心と見へます 私し風情の為す事は御眼だるく御座いませうが 何分とも行届かぬ所は御教導に預りたふ 偏へに願ひ上奉り升と降参したので 巡査殿得意になり イヤ拙者も言はるゝ通り芝居は大好きで振付もやつた事があると云へば道理で凡人ならぬ眼力で急所をお突き遊ばさるゝと感心致（ママ）い御座ります 何卒此の後も

御巡回の御暇には是非とも御立寄りに成りまして 御補助を願ひますと頼んだのを村の者が  
聞いて居て 師匠に雇つた人より巡査の方がエライげな 同じ芝居を演るならば少しでも良い  
師匠に習つた方が徳じや 皆々巡査の所へ頼みにに行け 合点だと十数名打ち連れて駐在所へ  
行き 芝居の振付方を嘆願に及ぶと 巡査も喜んで 然らば拙者が振付顧問に成つて教授致  
す御座ろうと 快よく引受けたので若者の喜び一方ならず 夫より毎日暇さへあれば件ん  
の巡査が出掛けて芝居を教へ 今では頼んで来た振付師は不要に成つた様な始末で 丸で巡  
査一人で背負つて立つ有様なりと 岐阜県には多能な巡査が抱へてあるとて其の近辺の者は  
大喜び 倅其の巡査は夜這ひ巡査と云へば直ぐ分かる人物なりとかや

⇒ 前掲⑫と同じく師匠(振付師)を雇っているが、その振付師より地元の巡査のほうが熱心に  
指導をするという笑い話である。しかし、その所業を評価しているわけではなく、「夜這ひ巡査」  
だというオチがある。

### ⑩ 明治28年(1895)10月31日

●村芝居流行 郡上郡の各村にては過般来村芝居が非常に流行し 所々にて興行せしが 尚  
其の後も追々催ほす処ありて 同和良村のみにても目下、土京、下洞、方須、下澤、法師丸  
の五ヶ所にて稽古を為し居ると云へり

⇒ 現郡上市和良町各地(土京・下洞・方須・沢・法師丸)。和良地域には、戸隠神社の拝殿舞台  
が上沢と宮地に現存している。いずれもかつては回り舞台だったようで、前者には明治16年  
(1883)、後者には21年(1888)の棟札がある<sup>14)</sup>。地芝居が盛んであったことがうかがえる。

### ⑪ 明治29年(1896)8月26日

●村落芝居 武儀郡菅田村朝日座にては 去る二十三日より昨日まで三日間 郡上郡小那比  
村の若者連地狂言一座を招き芝居を興行せしに 素人芝居にしては能く出来るとて日々大入  
りを占めたるよし

⇒ 現郡上市八幡町小那比の若者たちが、他の地域(現下呂市金山町菅田笹洞・桐洞)に乞われ  
て赴き、芝居を披露していたことが分かる。地域を超えた素人芝居の行き来はどの程度行われて  
いたのだろうか。この記事の武儀郡の朝日座については、幻燈会と学術演説が行われた(明治22  
年9月15日)、助岡屋岡助の芝居が不評だった(27年2月2日)という記事もある。演説会、芝居、  
幻燈会とさまざまな目的で同座は用いられていたのである。横道に逸れるが、「朝日座」は郡上郡  
八幡にもあり、明治24年9月6日、25年1月17日、26年1月10日、27年12月11日、28年4月17日  
に記事が認められる<sup>15)</sup>。

## 3. 今後の研究に向けて

以上の17記事から以下のポイントが指摘できる。

### 1) 経済及び社会状況との関連

娯楽は平和で余裕があってこそのものである。好景気は芝居を後押しし(①②⑨)、災害があれば  
自重が望ましいとされる(濃尾地震⑥⑦、水害⑩⑪、赤痢流行⑬)。国家の一大事である戦争時  
も同様である(⑧⑩)。災害や国難にも関わらず芝居をやろうとする若者らは批判される。その

背後には、芝居は怪しからぬものであるという通念または建前があり、それは子どもの芝居参加への批判にも表れている(③④)。

#### 2) 他の祭りとの関連

地芝居はもともと神事の余興であった。他の祭りとは併記されている記事に、そのことを改めて感じた(④⑧)。地芝居と地域との関係を考えるうえで、芝居以外にも視野を広げる必要があるであろう。

#### 3) 演目

地芝居の演目は、誰でも知っている大定番演目と、その地域ならではの独特な演目の2種類があると推測している。⑫の『仮名手本忠臣蔵』、『扇屋熊谷』、『鎌倉三代記』は、前者に相当する。

#### 4) 実施までの手続き

前項と同様、⑫が示唆する。記事内の常設委員、区長、総代、郡長、村長がそれぞれどのような役割だったのかは不明であるが、この他に警察に対する手続きもあったはずである。演目についての許可も必要だったかもしれない、3)と4)は合わせて検討する必要があるかもしれない。

#### 5) 振付師の呼び寄せ

現在の高雄歌舞伎や気良歌舞伎は外部から振付師を呼ばないが、東濃では振付師を依頼する。⑫⑮から、そのような例が明治(もしくはそれ以前)には郡上にもあったことが分かる。どのような人物を呼んでいたのか、謝礼はどうしていたのか。

#### 6) 地域を越えた地芝居の交流

素人による芝居でありながら、他の地域まで出かけて公演をしていたのは面白い(⑰)。2)に言及したように、もともと地芝居は神事の余興で、その地域で、いわば内輪で楽しむものだったはずである。それが独立して他地域にまで遠征するようになったというのは、純粋な娯楽としての色合いが強まっていたことを示す。地芝居団体がどのように行き来し、交流していたのだろうか。今回調査対象とした時期より後のことと思われるが、それぞれの地域の若連中は地芝居のための舎名を持っており、地芝居の楽屋の入口に「○○舎若連中より」と書かれた他村からの贈物ののれんがかけられたという<sup>16)</sup>。いつ頃からこのような慣例になったのだろうか。地域間の移動・交流という点で、5)の振付師の呼び寄せと通じるものがある。これらは探索が困難であろうが、岐阜という限られた地域をターゲットにすれば、断片的な事象は明らかにできるかもしれない。

### 4. おわりに

今回は17記事という非常に限られた素材を元に、今後の研究のきっかけを検討した。地芝居全体について以前から筆者が感じていたこと(社会との関わりや演目の選び方)については、よりその感を強くした。また、地芝居団体の地域間の移動は興味深い。地域に根付いた独自の文化である芝居が、他の地域に出かけても演じられる普遍性も有するようになっているのである。さらなる解明のためには、明治30年(1897)以降の『岐阜日日新聞』からの芝居関連記事抽出作業をしなければならないと痛感している。これが、最も具体的かつ必要性の高い今後の目標である。



## 〈追記〉

本研究ノート脱稿後、『歌舞伎 研究と批評』65号(2020.7)で「特集—〈素人芝居〉とその周辺」が編まれた。岐阜地域への言及も多く、示唆に富む特集であったことを付記する。

## 注

- 1 本稿では、基本的に「地芝居」を用いるが、引用記事中の素人芝居・村芝居等の用語も適宜用いる。
- 2 拙稿「岐阜の地芝居の足跡 —『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から—」(『岐阜大学留学生センター紀要2017』)参照。
- 3 太田成和『郡上八幡町史 上巻』八幡町役場、1955、p.349
- 4 『郷中盛衰記』の翻刻は、和良村教育委員会『和良村史 下巻』(岐阜県和良村、2002、pp.862~870)にあり。同書より引用。
- 5 高雄歌舞伎および市島の高雄神社拝殿舞台については、「高雄歌舞伎よもやま話」(郡上八幡まちづくり誌編集委員会『ふるさと創生読本 郡上八幡の本』はる書房、1992、pp.186~191)、「高雄歌舞伎」(『岐阜県の地芝居ガイドブック』岐阜女子大学地域文化研究所、2009、pp.54~55)、「市島高雄神社大神楽」(寺田敬蔵『続 郡上の祭り』郡上史談会、1978、pp.155~161)、高雄神社氏子総代『高雄神社と市島』(高雄神社氏子総代、1978)等を参照した。また、郡上市歴史資料館館長細川竜弥氏へのインタビューと、同氏提供の資料、同資料館所蔵資料からも種々の教示を得た。
- 6 残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、3月以降の「清流の国ぎふ 2020 地歌舞伎勢揃い公演」は延期となり、高雄・気良の競演も本稿執筆時までには観ることができなかった。中止ではなく延期であることに期待を寄せ、2021年以降に実現することを切望している。
- 7 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代中』大衆書房、1970、p.49
- 8 守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社、1988、pp.38~40
- 9 可児のお鞆祭りについては、『可児市史 第4巻 民族編』(可児市、2007)の「第二節 特徴ある祭礼 一 土田白髭神社のお鞆祭り」(pp.371~375)に詳しい。
- 10 このお鞆祭りについては、寺田敬蔵『続 郡上の祭り』(郡上史談会、1978)の「お鞆祭り」(pp.240~306)に詳しい。
- 11 寺田敬蔵『続 郡上の祭り』(郡上史談会、1978)の「小那比熊野神社大神楽」(pp.52~56)による。郡上市歴史資料館での聞き取りによると、同神社の神楽は2005年まで行われていたそうである。
- 12 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房、1972、pp.1074~1077
- 13 岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房、1972、pp.1163~1167
- 14 麓和善他『岐阜県近代和風建築総合調査報告書』岐阜県教育委員会、2016、pp.353~358
- 15 太田成和『郡上八幡町史 上巻』(八幡町役場、1960)の「郡上の芝居の起源」に、「明治三〇年ごろ本町の裏側の旧牢屋の跡のあたりに初めて芝居小屋が立ち、その後殿町(土木出張所付近)に朝日座が建てられるに至った。」とあるが、本記事の「朝日座」が同じ小屋であれば、創建年の範囲を狭めることができる。

- 16 吉岡勲監修・郡上史談会『岐阜県の歴史シリーズ (5) 図説郡上の歴史』郷土出版社、1986、  
p.150

### 参考文献

- 有代和夫『写真でみる郡上百年』郷土出版会 1984  
太田成和『郡上八幡町史 上巻』八幡町役場、1960  
太田成和『郡上八幡町史 下巻』八幡町役場、1961  
可見市『可見市史 第4巻 民族編』可見市 2007  
蒲池卓巳「地芝居あれこれ (31) 高雄歌舞伎と気良歌舞伎」『全日本郷土芸能会 会報』93号 2018.  
10  
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代中』大衆書房 1970  
岐阜県『岐阜県史 通史編 近代下』大衆書房 1972  
岐阜県文化財保護協会『岐阜県の文化財』大衆書房 1988  
岐阜女子大学地域文化研究所『岐阜県の地芝居ガイドブック』2009  
郡上八幡まちづくり誌編集委員会『ふるさと創生読本 郡上八幡の本』はる書房 1992  
高雄神社氏子総代『高雄神社と市島』高雄神社氏子総代 1978  
土谷桃子『岐阜地域芝居興行記録一覧稿 (明治初年～)』JSPS 科研費25370213助成調査成果 2016.  
3  
土谷桃子「岐阜の地芝居の足跡 —『岐阜日日新聞』明治前半期記事の渉獵から—」『岐阜大学留  
学生センター紀要2017』2018  
寺田敬蔵『郡上の祭り』郡上史談会 1977  
寺田敬蔵『続 郡上の祭り』郡上史談会 1978  
麓和善他『岐阜県近代和風建築総合調査報告書』岐阜県教育委員会 2016  
守屋毅『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社 1988  
吉岡勲監修・郡上史談会『岐阜県の歴史シリーズ (5) 図説郡上の歴史』郷土出版社 1986  
和良村教育委員会『和良村史 下巻』岐阜県和良村、2002

『「全国の地芝居 (地歌舞伎)」調査報告書』平成27年度 文化庁「全国地芝居 (地歌舞伎) の実  
態等データ作成業務」文化庁文化財部伝統文化課 2016 (PDF版: [https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/jishibai\\_jikabuki/pdf/h27\\_chosahokokusho.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/jishibai_jikabuki/pdf/h27_chosahokokusho.pdf))

### インターネットサイト

- 岐阜県神社庁公式ホームページ <http://www.gifu-jinjacho.jp/> (20200622確認)  
岐阜地歌舞伎ツーリズムネットワーク事務局「地歌舞伎」<https://www.jikabuki.net/> (20200622確  
認)





年 報 編 (2019年4月～2020年3月)

1. 日本語研修コース	29
2. 日本語・日本文化研修コース	43
3. 日本社会文化プログラム	46
4. 全学共通教育	48
5. 年間行事	49
6. 交流ラウンジ	58

資 料

岐阜大学留学生数	62
----------	----



# 1. 日本語研修コース

## 1.1 2019年度前期（2019年4月～9月）

日本語研修コースには集中コースと一般コースそれぞれにレベル分けしたクラスがある。集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースはゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の5レベルを開講した。ここに、学内公募によって、留学生69名（研究生17名、大学院修士課程30名、大学院博士課程16名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）6名）の申請があった。コース別の申請者数は、集中コース10名、一般コース59名であった。しかし、プレイスメントテストに来なかった者、プレイスメントテスト後に申請を取り消した者などがおり、受講者は、日本語・日本文化教育センター所属の留学生6名（日本社会文化プログラム6名）も含めた計72名であった。

プレイスメントテスト及び面接の結果、集中コースAクラスが2名、Bクラスが6名、Cクラスが3名、そして一般コースA1クラスが16名、A2クラスが9名、Bクラスが18名、Cクラスが8名、Dクラスが10名となった。

以下に本学期の集中コース・一般コースのスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

### 1.1.1 集中コース 第46期

- 4月10日（水） 開講式
- 4月11日（木） 授業開始
- 7月31日（水） 授業終了

#### [Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [富田]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [小寺]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [河田]
2	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [千葉]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [石井]	総合日本語A [廣瀬]
3	総合日本語A [小寺]	総合日本語A [中村]			

### 授業報告（Aクラス担任：吉成）

今学期の受講者は2名（日本社会文化プログラム学生1名、学内公募の研究生1名）で、国籍はオーストラリア、チリであった。2名という少人数に加え、まったく初めて日本語を学ぶ人と、国で初級文法は学んだけれどしっかり勉強しなおしたい人の組み合わせだったため、学期当初のレベルの差に注意する必要がある。ただ、学期後半やテストの結果などは、本人の努力もあり、差はなくなっていった。少人数だからこそ、個々に目を向けた指導も可能だったといえる。

少人数であれ、教員9名によるチーム・ティーチングで授業がすすめられた。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業を行った。学生ははじめに予習復習に取り組み、テストの結果もいいものだった。ただ、学生が二人だったため、会話のペア練習は単調になってしまうこともあり、工夫が必要だった。

毎学期の課題でもあるが、文字を覚えるところから始める学習者と、少し初級の知識がある学習者との合同クラスになることが多いAクラスで、どのように調整しながら進めていくのか、考えていかなければならない。

### [Bクラス]

時間割：10科目必修（語彙読解Bは自由選択）

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [小寺]	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [廣瀬]	総合日本語B [河田]	総合日本語B [橋本]
2	語彙読解B [野原]	口頭表現演習BC [橋本]	文章理解B [橋本]	文章表現B [野原]	聴解演習B [河田]
3		口頭表現B [石井]			

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Bクラス担任：橋本）

Bクラスは初中級レベルの受講生6名（日本社会文化プログラム学生1名、学内公募の研究生5名（中国3、インドネシア1、パキスタン1）、であった。9月の修了判定の結果、5名が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまで学んだ初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。今期のBクラスでは、初級文法が

十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノローグ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が6名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。自発的に発言する学生が多く、積極的に日本語を使おうとする努力が見られた。課題にも積極的に取り組み、質問も多く出て、活発なクラスになった。

### 【Cクラス】

時間割：全10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合C(演習) [吉成]	総合日本語C [中村]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [野原]	口頭表現C [田辺]
2	聴解演習C [小寺]	口頭表現演習BC [橋本]	文章理解C [廣瀬]	文章表現C [河田]	
3		文法C [千葉]			

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者3名（日本社会文化プログラム学生2名、学内公募の研究生1名）、国籍はアメリカ、オーストラリア、中国という少人数のクラスとなった。「総合日本語C」の火・水・木曜日の3コマで『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。毎週月曜日の「総合C（演習）」は日本人学生との合同授業で言語学の基礎知識を学びながら、「読む・聞く・話す・書く」活動を通して日本語力を高める演習の時間とした。

授業内外で、学生同士が仲良く助け合いながら日本語学習に取り組んでいた。人数は少ないものの、各国について意見交換したり、苦手なことを補い合う姿勢がとてもよかった。疑問がある時にはきちんと質問する、自分の意見を述べるなど、授業中の積極的な態度もよかった。少人数であることの利点を学習者もよく心得ており、スムーズな授業運営が行

えた学期だった。

### 1.1.2 一般コース

4月11日（木） 授業開始

7月31日（水） 授業終了

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、ゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の5レベルを設定して開講した。なお、一般A1・A2・Dクラスは、このコースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

#### [A1クラス]

##### 時間割

	月	火	水	木	金
2	一般A1 [富田]	一般A1 [中村]	一般A1 [小寺]		一般A1 [千葉]

##### 授業報告

一般A1クラスは、このコースを取る学生単独の科目となっている。日本語未習者対象のクラスで受講者は16名（研究生2名、修士課程14名）である。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、一般A1では機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、教材にローマ字を併記している『にほんごではなしましょう』（らんぐ）教科書として使用しているが、以前から文字学習への要望が多数あり、文字学習も行なっている。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

[A 2 クラス]

時間割

	月	火	水	木	金
1		一般A 2 [千葉]	一般A 2 [中村]	一般A 2 [石井]	一般A 2 [廣瀬]

授業報告

一般A 2 クラスは、初級レベルのクラスである。受講者は9名（研究生2名、修士課程4名、博士課程3名）であった。うち先学期に一般A 1 クラスを受講した学生が8名受講した。一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いので、一般クラスの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まるごと 初級1 A 2 りかい』を使用した。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

[B クラス、C クラス]

時間割（集中Bクラス、Cクラスと共通科目）

		月	火	水	木	金
一般B	1			総合日本語B [廣瀬]	総合日本語B [河田]	総合日本語B [橋本]
	2	語彙読解B [野原]		文章理解B [橋本]		聴解演習B [河田]
一般C	1	総合C(演習) [吉成]				
	2	聴解演習C [小寺]		文章理解C [廣瀬]		
	3		文法C [千葉]			

授業報告

一般Bクラスは初中級レベルのクラスである。受講者は18名（研究生4名、修士課程5名、博士課程9名）であった。このうち集中Aクラスから参加した学生が5名、一般A 2 クラスから参加した学生が5名であった。

初中級レベルは、初級を一通り学習した学生を対象としているが、学習項目が違ったり、また上記の一般A 2 を先学期に受講して初中級レベルに参加する学生は文法練習自体が少ないため他の学生より理解や練習に時間を要するなどの問題があるが、今学期は一

一般コースの学生もよく勉強できていた。集中Aから参加した学生（5名）一般A2から参加した学生（5名）も、漢字の学習などにも積極的に取り組んでいた。

一般Cクラスは8名（研究生2名、修士課程5名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名）であった。一般Cクラスの学生は履修届けを出して科目を選択するが、途中で授業に来なくなる学生が数名いた。どちらも研究生であり、専門授業が忙しいという理由だけではないように思う。真面目に授業に参加している一般Cの学生もいるので、このような差が出ないように注意していきたい。

## [Dクラス]

### 時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]	総合日本語D [石井]		総合日本語D [土谷]	総合日本語D [千葉]
2		文章理解D [石井]			口頭表現D [田辺]

### 授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期は、総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、文章理解D（同）を提供した。学生は最小1コマから最大6コマまで、専門科目の受講状況に合わせて日本語科目を選択した。

本学期のDクラス受講者は、10名（日本社会文化プログラム（以下社会文化）学生3名、協定校からの交換留学生4名（学部所属・大学院所属それぞれ2名）、学内公募の研究生1名、同修士課程2名）で、国籍はアメリカ（1）、スウェーデン（1）、タイ（1）、フランス（1）、中国（6）であったが、途中でいくつかの科目を放棄する学生が発生した。社会文化には、それぞれ専用の日本語科目が上記以外にも提供された。全科目必修が義務付けられている社会文化以外の修了学生7名の受講状況を見ると、全6コマを選択した学生が1名、5コマが3名、1コマが3名であった。

先学期から総合Dの教科書を『日本をたどりなおす29の方法』（東京外国語大学出版社）に変更したが、今学期のDクラス学生は日本語力が先学期に比べてかなり劣ることが当初から予想された。以前の教科書に戻すかどうか熟慮したが、スピードを落とし宿題や試験の難易度を下げて対応することにした。それに応えて努力した学生ももちろんいたが、途中から無断で授業に来なくなる学生や、明らかに学習意欲を失いたが単位だけのために教室に来る学生が発生した。前者は部局間協定校からの学生だが、指導教員との連絡が一切



取れず、当該教員・学部への不信感が強まる結果となった。後者は社会文化の学生で、出席さえすれば合格すると思っていたようであるが、現実はそうは甘くなかった。

今学期Dクラスで苦勞した学生は、先学期のCクラスの時から不安視された学生たちであった。明らかにレベルが合わないことが学期開始前から分かっている学生をどう扱うかは、Dクラスのみならずコース全体で考えなければならない。

本クラスの学生には、日本語・日本文化教育センターのかかわる各種行事への出席を奨励し、授業との振替の措置を取った（5月15日（水）郡上踊りワークショップ、7月10日（水）能楽ワークショップ）。

## 1.2 2019年度後期（2019年10月～2020年3月）

日本語研修コースは、先学期同様、集中コースは初級（A）、初中級（B）、中級（C）の3レベル、一般コースはゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の5レベルを開講した。ここに、学内公募によって、留学生81名（教員研修生1名、研究生31名、大学院修士課程29名、大学院博士課程11名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）9名）の申請があった。コース別の申請者数は、集中コース14名、一般コース67名であった。しかし、プレースメントテストに来なかった者、プレースメントテスト後に申請を取り消した者などがおり、受講者は、日本語・日本文化教育センター所属の留学生14名（日本社会文化プログラム7名、日本語・日本文化研修コース7名）も含めた計89名が受講することになった。

プレースメントテスト及び面接の結果、集中コースAクラスが9名、Bクラスが4名、Cクラスが7名、そして一般コースA1クラスが16名、A2クラスが12名、Bクラスが11名、Cクラスが5名、Dクラスが25名となった。

以下に本学期の集中コース・一般コースのスケジュールと各クラスの時間割及び授業報告をまとめる。

### 1.2.1 集中コース 第47期

10月9日（水）開講式

10月10日（木）授業開始

12月25日（水）～1月5日（日） 冬季休暇

2月7日（金）授業終了

## [Aクラス]

時間割：全科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語A [富田]	総合日本語A [中村]	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [河田]	総合日本語A [田辺]
2	総合日本語A [小寺]	総合日本語A [千葉]	総合日本語A [石井]	総合日本語A [三輪]	総合日本語A [松尾]
3	総合日本語A [吉成]	総合日本語A [吉成]			

授業報告（Aクラス担任：吉成）

初めて日本語を学習する人がほとんどである9名（学内公募の研究生9名、うち教員研修生1名含む）が受講した。受講生の国籍は中国（3）、バングラデシュ（2）、インドネシア（2）、エジプト、ケニアであった。

前期と同様、ティーム・ティーチングによる「総合日本語A」の授業で、初級文法・運用を学ぶ。『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用し、各課の新出語、文型をドリル練習や文作、会話など口頭練習を中心に授業が行われる。学生には授業外での予習・復習を求め、新しい課に入る際には予習内容を確認する文法・語彙の予習クイズを、学習した文法項目の理解度を確認するための文法復習テストを実施した。

今学期は今までにないほど苦労した学期であった。多くの学生が文字を覚えるところからつまずき、語彙・文法などなかなか身につかないまま学期が進んでいった。課ごとに予習クイズ（課の語彙と学習項目を確認するためのもの）を実施しているが、課が進んでも0や1、2点しか取れない学生が多くいた。勉強のコツがつかめない、語彙が覚えられない、覚えてもすぐに忘れてしまう、予習をしてこないなど、いろいろな理由が考えられるが、復習テストも同様に、合格基準である60点を超えられない学生がクラスの半数を占めてしまう結果となった。ほぼ全員が同じ状態であったこともあり、大幅にスケジュール変更を行い、21課まで進んだところで、もう一度9課からやり直すことにした。これが功を奏し、やっと語彙や文法が身につく、日本語が使えるようになっていった。そのことが学生のモチベーションをあげることができた。しかし、個々の事情もあって途中でクラスを辞める人や、点数を最後まで上げられなかった学生もおり、最終的に修了できたのは5名であった。

当初予定していたのは『みんなの日本語』48課までだったが、数度のスケジュール変更により、37課までしかすすめなかった。何をどこまで学習するのかという目標とスケ

ジュールをしっかりとて、進め方も工夫する必要があると実感した。来学期以降、学生の様子を見て、臨機応変に対処することも念頭におき、考えていきたい。

[Bクラス]

時間割：10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合日本語B [橋本]	総合日本語B [橋本]	文章表現B [石井]		総合日本語B [橋本]
2	語彙読解B [野原]	口頭表現演習BC [橋本]	聴解演習B [廣瀬]	総合日本語B [野原]	
3	口頭表現B [小寺]	総合日本語B [松尾]			

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

授業報告（Bクラス担任：橋本）

今期のBクラスは初中級レベルの受講生4名（学内公募の研究生2名（中国2）、日本社会文化プログラム学生2名（オーストラリア1、スペイン1）であった。2月の修了判定会議の結果、3名が修了した。

Bクラスは初級レベルを終了した学生を対象とした初中級レベルのクラスで、これまでに学習した初級文法を正確に使いこなすことを目標とする。Bクラスでは、初級文法が十分身につけていない学生がいることを考慮し、初級文法復習（活用中心）を行ない、その後『中級へ行こう』（スリーエーネットワーク）をベースに初級文法の復習と運用練習を行なった。また、文章表現Bでは、習った文法項目の短文作成練習を行い、正確な文作成を目指した。また口頭表現については、モノログ（スピーチ）を練習する口頭表現Bと、ダイアログ（会話）を中心に練習する口頭表現BCを設けた。口頭表現BCは本学の全学共通教育との合同授業として、日本人学生と様々な活動や会話練習などを行なった。

今期のBクラスは、学生が4名と少ない人数であったこともあり、丁寧に進めることができた。当初は身につけている語彙が少なく、また学習した文法を実際に話して使うことがあまりなかったためか言葉を発するまでに時間がかかる学生が多かったが、徐々にいろいろ話すことができるようになった。以前より話せるようになったという実感を持った学生も多かった。漢字学習にも積極的に取り組み、中には、最初に示した漢字は国で学習済なのでもっと難しいものを学習したいという意欲的な学生もいた。

## [Cクラス]

時間割：全10科目必修

	月	火	水	木	金
1	総合C(演習) [吉成]	総合日本語C [吉成]	総合日本語C [小寺]	総合日本語C [野原]	文章表現C [河田]
2		口頭表現演習BC [橋本]	聴解演習C [松尾]	口頭表現C [河田]	文法C [千葉]
3		文章理解C [石井]			

網掛けのクラスは、一般コースと共通開講

### 授業報告（Cクラス担任：吉成）

受講者は中級前期レベルの学習者7名（日本社会文化プログラム学生4名、協定校からの交換留学生（特別聴講学生）1名、学内公募の研究生2名）、国籍は中国（4）、アメリカ、オーストラリア、スペインであった。残念ながら、学期が始まってすぐに、研究が忙しいので日本語授業が続けられないとしてコースを辞めた学生、また学期途中で大学院入試準備のため忙しいことを理由に辞めた学生がいた。どちらも学内公募の研究生だった。集中コースは毎日授業があり、課題も多いことを学内公募の際に告知しているにも関わらず、このような事態が起きるのは残念である。最終的には社会文化プログラムの学生も含め、全員が協定校の交換留学生である5名となった。

「総合日本語C」（火・水・木）では『中級を学ぼう（中級前期）』（スリーエーネットワーク）を中心に、各担当が作成する副教材を使用しながら、中級文法項目を学習し、読解や作文などを行なった。各技能科目は先学期と同様である。

学生は全員、国で日本語を学んできた交換留学生だったこともあり、まじめに課題に取り組み、基礎はできていた。しかし実際に日本語を使ってコミュニケーションをとるための「聞く、話す」技能が足りない学生もいた。また、ある程度コミュニケーションはできても正しい日本語とはいえない日本語使用も目立っていた。そのため、アウトプットの時間を多くし、小さい間違いでもきちんと訂正する指導を心掛けた。その点に気がつき、自ら注意しながら学習をすすめていった人はコツコツ力をつけていったが、注意が足りなかった人には大きな伸びは見られなかった。中級レベルの学習者にとって、自らの気づきが重要であることがよくわかった学期だった。

## 1.2.2 一般コース

10月10日（木） 授業開始

12月25日（水）～1月5日（日） 冬季休暇

2月7日（金） 授業終了

一般コースは、専門の授業を中心に受講し、空いている時間に日本語を勉強する学生を対象としたコースで、ゼロ初級（A1）、初級（A2）、初中級（B）、中級（C）、中上級クラス（D）の5レベルを設定して開講した。なお、一般A1・A2・Dクラスは、このコースを取る学生単独の科目となっているが、一般B・Cクラスは集中コースと共通に開講される科目となっている。

## [A1クラス]

## 時間割

	月	火	水	木	金
2	一般A1 [松尾]	一般A1 [中村]	一般A1 [小寺]		一般A1 [河田]

## 授業報告

一般A1クラスは日本語未習者対象のクラスで、受講者は16名（研究生2名、修士課程12名、博士課程1名、協定校からの学部あるいは大学院所属の交換留学生（特別聴講学生）1名）であった。20名を越える学生数であったが、授業開始当初から欠席の続く学生もいた。

初級レベルは文法積み上げで勉強を進めているので継続的な学習が必要であるが、専門の授業など多忙で、特定の曜日しか出られない、あるいは欠席が続くことで十分な学習ができない学生が多いことから、一般A1では機能シラバス、場面シラバスのような形で（文法練習を中心にせずに）一つ一つの授業で学習項目が完結する授業を組んでいる。このクラスは口頭表現中心に授業を進めるので、文字学習は必ずしも必要ではなく、また文字学習を負担と感じる学生もいると考え、教材にローマ字を併記している『にほんごではなしましょう』（らんぐ）教科書として使用しているが、以前から文字学習への要望が多数あり、文字学習も行なっている。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

## [A 2 クラス]

### 時間割

	月	火	水	木	金
1	一般A 2 [小寺]	一般A 2 [千葉]	一般A 2 [廣瀬]		一般A 2 [松尾]

### 授業報告

一般A 2 クラスは初級レベルのクラスで、受講者は12名（研究生 2 名、修士課程 7 名、博士課程 3 名）であった。うち先学期に一般A 1 クラスを受講した学生が 6 名受講した。一般クラスは、専門の授業などで多くの学習時間が取れない学生が多いので、一般クラスの教科書として活用形のルールが繰り返し何度も出てくる『まるごと 初級1 A 2 りかい』を使用した。専門の授業で忙しい中、受講生は熱心に授業に参加していた。

## [B クラス、C クラス]

### 時間割（集中Bクラス、Cクラスと共通科目）

		月	火	水	木	金
一般B	1	総合日本語B [橋本]				総合日本語B [橋本]
	2	語彙読解B [野原]		聴解演習B [廣瀬]	総合日本語B [廣瀬]	
一般C	1	総合C(演習) [吉成]				
	2			聴解演習C [松尾]		文法C [千葉]
	3		文章理解C [石井]			

### 授業報告

一般Bクラスは初中級レベルのクラスで、受講者は11名（研究生 3 名、修士課程 4 名、博士課程 4 名）であった。このうち一般A 2 クラスから参加した学生が 5 名であった。

初中級レベルは、初級を一通り学習した学生を対象としているが、学習項目が違っていたり、また上記の一般A 2 を先学期に受講して初中級レベルに参加する学生は文法練習自体が少ないため他の学生より理解や練習に時間を要するなどの問題があるが、一般コースの学生もよく勉強できていた。一般A 2 から参加した学生も、漢字の学習などにも積極的

に取り組んでいた。

一般Cクラスは5名（研究生2名、修士課程2名、博士課程1名）であった。残念ながら、このうち4名が学期途中から授業に来なくなり、理由もわからないまま途中放棄という形となってしまった。履修届けの提出を必須として以来、このような事態は避けられてきたのだが、今学期は効果がなかったのだろうか。来学期以降、さらに履修届けの重要性、学期最後まで出席することの必要性をガイダンスで示したい。

## [Dクラス]

### 時間割

	月	火	水	木	金
1	総合日本語D [野原]	総合日本語D [石井]	総合日本語D [土谷]		総合日本語D [千葉]
2	聴解演習D [富田]	文章理解D [石井]			口頭表現D [田辺]

Dクラスには日本語・日本文化研修コースの学生（以下日研生）が含まれるが、日研生は上記以外に日研生専用科目を受講する。詳細は第2章（日本語・日本文化研修コース）を参照のこと。

### 授業報告（Dクラス担任：土谷）

本学期のDクラス受講者は、25名（日本語・日本文化研修留学生（以下日研生）7名、日本社会文化プログラム（以下社会文化）学生1名、協定校からの交換留学生6名（学部所属2名・大学院所属4名）、学内公募の研究生7名、同修士課程4名で、国籍はオーストラリア（1）、スウェーデン（1）、タイ（1）、中国（18）、ベトナム（2）、ポーランド（1）、マレーシア（1）であった。日研生と社会文化には、それぞれ専用の日本語科目（文章表現D）が上記以外にも提供された。全員が受講できる授業としては、総合D（週4コマ）、口頭表現D（週1コマ）、聴解演習D（同）、文章理解D（同）を提供した。口頭表現Dと文章理解Dは、日研生用と研修コース用を別立てにした。

毎年秋学期は申請者が多く、特に近年はDクラスの学生が多い。今回は25名という前代未聞の大人数となり、学期初めの2週間は人数調整・説得の対応に追われることになった。日本語・日本文化研修コース（以下日研生）および日本社会文化プログラム（以下社会文化）と、日本語研修コース（研修）について別途科目を設定している文章表現D・文章理解Dについては人数の問題はほぼなかったが、日研生・社会文化・研修がともに受講する総合Dおよび聴解演習D、研修のみ対象だが毎学期希望者が多い口頭表現Dは、許容人数を超える恐れが生じ、人数調整に非常に苦慮した。



今後も秋学期には同様の問題が起こることが予想される。今学期は個別に学生に交渉し、次学期に履修を延期してもらう等で対応したが、毎年秋学期にこのような不毛な調整をするのは時間・労力ともに無駄である。人数を絞らなければならないなら、合理的かつ説得力のある説明が必要であるし、希望者全員の受け入れ可とするなら、それを見越したコース設定を模索する必要がある。

学生の受講態度はおおむね良好で、本センター所属学生（日研生・社会文化）がクラスを牽引していく場面が多かった。研修の学生はほとんどが中国人学生であるが、熱心さの濃淡はあるものの、大きな問題となる学生はいなかった。

本クラスの学生には、日本語・日本文化教育センターのかかわる各種行事への出席を奨励し、授業との振替の措置を取った（12月11日（水）十二単の着装と体験～日本の民俗衣装～）。

## 2. 日本語・日本文化研修コース

### 2.1 第18期（2018年10月～2019年8月）概要

第18期生は、大使館推薦の国費留学生1名（ウクライナ・ドニプロ国立大学）、大学推薦の国費留学生3名（タイ・カセサート大学、同・チェンマイ大学、中国・電子科技大学）、私費留学生2名（大学間学術交流協定による交換数の枠内での受け入れ、いずれも中国・広西大学）の合計6名だった。

第18期 履修／修了生（姓アルファベット順）

ドルディネツ・イエヴヘン（Durdynets, Yevhen）	ウクライナ・ドニプロ国際大学
江 愷悌（Jiang, Kaiti）	中国・電子科技大学
黎 宇傑（Li, Yujie）	中国・広西大学
梁 雅麗（Liang, Yali）	中国・広西大学
サオカムケット・スパーワディー（Saokumkate, Supawadee）	タイ・チェンマイ大学
トンピチャイ・パーキン（Thongphichai, Pakin）	タイ・カセサート大学

例年通り、18期生も約1年におよぶ期間中、前半の秋学期に日本語と日本文化の科目を集中的に学び、後半の春学期にはそれらの授業に加えて、日本人学生とともに全学共通教育等で開講されている授業を履修した。さらに、郡上市との連携事業、十二単の着装体験、郡上踊りワークショップ、能楽ワークショップ、茶道の実習など、伝統的な日本文化に触れる機会を数多く持った。

本コースの詳細については、以下のサイトを参照願いたい。

<http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jlcourse/>

### 2.2 論文作成と発表会

本学の日本語・日本文化研修コースの特色のひとつは、修了論文の作成を重視していることにある。第18期生たちは、秋学期を終えて後半の春学期になると、それぞれの興味・関心にしたがってテーマを設定し、指導教員のもとで論文の作成に励んだ。日研生コース担当教員2名がそれぞれ3名の学生を担当し、論文指導に当たった。

論文提出後の8月4日（日）には、今期で13回目を数える「留学生は“日本”をどう見たか」と題する研究成果の発表会を、JR岐阜駅近くの本学サテライトキャンパスで開催した。本学関係者や、酷暑の中足を運んでくれた市民との活発な意見交換が行なわれ、充実

した発表会となった。

本発表会については、本学公式サイトにも掲載されている。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2019/08/entry19-7371.html>

## 論文テーマと指導教員

ドルディネツ・イエヴヘン

「翻訳における日本語オノマトペ —『ハリー・ポッターと賢者の石』の英語原作・中国語訳・ウクライナ語訳との比較—」

(指導教員：土谷桃子)

江 愷悌 (コウ ガイテイ)

「私たちはまだ「腐向け」を知らない —『名探偵コナン』劇場版の二次創作を例として—」

(指導教員：土谷桃子)

黎 宇傑 (レイ ウケツ)

「明末・清初期のキリスト教受容に関する考察 —明朝とイタリア人宣教師マテオ・リッチ、そして同時期の日本との比較—」

(指導教員：森田晃一)

梁 雅麗 (リョウ ガレイ)

「ブラックバイトから立ち上がれ —岐阜大学の留学生に対する調査—」

(指導教員：森田晃一)

サオカムケット・スパークディー

「同棲は結婚に繋がるか —タイ・日における大学生の意識—」

(指導教員：土谷桃子)

トンピチャイ・パーキン

「社名のネーミング —人名および欧米企業のネーミングとの比較から—」

(指導教員：森田晃一)

## 2.3 履修科目

履修科目は以下の通りである（この他に選択科目もある）。

授業科目	秋期	春期	合計
総合日本語	5 (5)	—	5 (5)
全学共通教育科目等	—	3 (6)	3 (6)
日本語読解演習	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語文章表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語口頭表現	1 (2)	1 (2)	2 (4)
日本語聴解演習	1 (2)	—	1 (2)
現代日本の社会	1 (2)	—	1 (2)
日本事情C II	1 (2)	—	1 (2)
日本文学概論	1 (2)	—	1 (2)
地域実見	1 (2)	—	1 (2)
日本の文化芸術	—	1 (2)	1 (2)
論文指導	—	1 (1)	1 (1)
修了論文	—	(4)	(4)
合計	13 (21)	8 (19)	21 (40)

表中の数値は、授業数（単位数）を表す（1授業は90分）。

## 3. 日本社会文化プログラム

### 3.1 受講概要

日本社会文化プログラムは、学術交流協定を結んでいる大学とからの交換留学生のうち、日本語、あるいは日本文化を学ぶ希望を持つ学生を日本語・日本文化教育センターで受入れ、総合的な日本語・日本文化教育を行なうために開講したプログラムである。2007年度に開講し、2016年度は第19期となる。本プログラムは4つのコースを設けており（異文化理解コース1、異文化理解コース2、日本文化入門コース、日本社会文化コース）、各学生のレベルに合わせてコースを設定している。

本コースの詳細については、以下のサイトを参照願いたい。

<https://www.glocal.gifu-u.ac.jp/center/education/jscprogram/>

#### 3.1.1 第24期（2018年度後期～2019年度前期）

2018年度後期に第24期の4名を迎えた。留学期間は1年間である。

1名は異文化理解コース2と日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

3名は日本文化入門コースと日本社会文化コースを受講し、2名は所定の単位を取得し修了したが、1名は修了要件を満たさなかったため、修了できなかった。

ターリ アピゲイル キャスリーン	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	異文化理解コース2・ 日本文化入門コース修了
ペッタソン ハンス ラスムス フェニックス	スウェー デン	ルンド大学	日本文化入門コース・ 日本社会文化コース修了
クンカン チョーパカー	タイ	チェンマイ大学	日本文化入門コース・ 日本社会文化コース修了
レイシー パトリック コンリン	アメリカ	ノーザンケンタッキー大学	日本文化入門コース修了

#### 3.1.2 第25期（2019年度前期～2019年度後期）

2019年度前期に第25期の3名を迎えた。留学期間は1年間である。

1名は異文化理解コース1・2を受講し、所定の単位を取得した。

1名は異文化理解コース2、日本文化入門コースを受講し、所定の単位を取得した。

1名は日本文化入門コース、日本社会文化コースを受講し、所定の単位を取得した。

チバ エミ フランセス キョウコ	オースト ラリア	シドニー工科大学	異文化理解コース1・2修了
ケネディー リアム ロバート	オースト ラリア	シドニー工科大学	異文化理解コース2、日本文化入門コース修了
シンガー ジェームズ アーロン	オースト ラリア	シドニー工科大学	日本文化入門コース、日本社会文化コース修了

### 3.2 社会文化プログラム専用科目

このプログラムでは、日本文化を実践的に学ぶ機会を提供するため、「日本文化へのいざない」という科目を設けている。2019年度前期の「日本文化へのいざない」は、本学客員教授で、茶道江戸千家副家元である川上紹雪氏に茶道に関する講義をお願いした。茶道に関する講義と共に、実際に茶道を体験する機会があり、日本文化理解の入門として、受講生には大変得るものがあった。

## 4. 全学共通教育

### 4.1 概要

日本語・日本文化教育センター教員はそれぞれ、岐阜大学全学共通教育科目も担当している。日本語及び日本事情科目、人文科学科目の授業、また日本人学生と留学生の合同授業など、多様な内容・形態の授業を提供している。

### 4.2 2019年度 前学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語及び日本事情科目	日本語D I—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本語D III—聴解—	月4	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情A I	火4	森田	
	日本事情C I	火2	橋本	
人文科学科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講 日本事情C Iと同時開講

### 4.3 2019年度 後学期

科目	授業名	時間	担当	備考
日本語及び日本事情科目	日本語D II—文章表現—	月3	土谷	日本社会文化プログラム学生も受講
	日本事情C II	水2	森田	日本語・日本文化研修生も受講
人文科学科目	言語学入門—日本語学入門—	月1	吉成	日本語研修コース集中・一般Cクラスも受講
	日本文学—近世文学の世界—	月2	土谷	
	日本語表現論—日本語口頭表現—	火2	橋本	日本語研修コース集中B・Cクラスも受講
	日本近世史—近世文化史—	火2	森田	
	異文化論II—通過儀礼（人の一年） に見る世界の諸地域—	水2	森田	日本事情C IIと同時開講



## 5. 年間行事

日本語・日本文化教育センターでは年間を通じ、様々な行事を行ってきた。2019年度（2019年4月～2020年3月）の年間行事を一覧にまとめ、主な行事（下線）内容について報告する。

### 2019年

#### 4月

日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（4月10日）

日本語研修コース授業開始（4月11日）

#### 5月

郡上踊りワークショップ（5月15日）

#### 6月

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）受入開始（6月26日）

#### 7月

ラウンジチューター企画“七夕まつり”（7月3日）

能楽（能・狂言）ワークショップ（7月10日）

岐阜大学夏期短期留学（サマースクール）修了式及び歓送会（7月24日）

日本語研修コース授業終了（7月31日）

#### 8月

日本語・日本文化研修留学生論文発表会（8月4日）

観光立市郡上推進事業「郡上おどりを暮らすように楽しむモニターツアー」（8月7日）

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム修了式（8月21日）

#### 10月

日本語・日本文化研修コース、日本社会文化プログラム、日本語研修コース開講式（10月9日）

日本語研修コース授業開始（10月10日）

郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修・事前研修）（10月31日）

#### 11月

郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修・現地研修）（11月16日）

第18回岐阜県内外国人留学生日本語弁論大会（11月23日）

#### 12月

「十二単の着装と体験 ～日本の民俗衣装～」特別講義（12月11日）

2020年

1月

ラウンジチューター企画 “日本のお正月”(1月8日)

2月

日本語研修コース授業終了(2月7日)

### 5.1 郡上踊りワークショップ

2019年5月15日(水)13:30~15:00、郡上踊りワークショップを実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2019/05/entry23-7147.html>

#### 日本語・日本文化教育センター 第8回郡上踊りワークショップを開催しました

本学グローバル推進機構日本語・日本文化教育センターは、2019年5月15日(水)、柳戸会館1階集会ホールにおいて、郷土芸能のひとつであり国の重要無形民俗文化財に指定をされている「郡上踊り」を学ぶワークショップを開催しました。当日は、留学生、教職員約30人が参加しました。このワークショップは、サマースクール(受入)郡上プログラム



や本学との地域連携協定の締結などの交流実績がある郡上市との交流促進の一環として実施しているもので、今回で8回目の開催となります。

ワークショップが始まる前に、学生たちは、美濃市の国際交流支援グループ「せびあ会」の方々に浴衣を着付けてもらいました。アメリカ、インドネシア、オーストラリア、韓国、スウェーデン、タイ、チリ、中国、フランス、マレーシア、ミャンマーなどの学生たちは、色とりどりの浴衣を前に、どれを着ようか嬉しそうに選んでいました。



ワークショップには、郡上踊

り保存会囃子部・同口明方囃子部の遠藤光生氏、熊澤里重氏を講師としてお招きしました。最初に郡上市や郡上踊りの概要についての説明を聞いてから、郡上踊りの中で代表的な曲の「かわさき」と「春駒」の2曲の踊りを習いました。

既に郡上踊りを習ったことがある学生が数名おり、彼らのスムーズな動きには講師も目を見張っていました。一方、初めての体験で、独特の動きとリズムに苦戦する学生もいましたが、「上手下手ではない、笑顔で楽しく踊ることが一番大切」という講師の言葉に励まされて、それぞれがのびのび踊ることができました。最後に、楽しくそして真剣に踊った学生7名が講師によって選ばれ、賞品が手渡されました。留学生にとって、日本そして岐阜を感じる貴重な機会となりました。

## 5.2 岐阜大学サマースクール（受入）

第32回サマースクールは、グローバル推進機構の全学事業として6月26日（水）～7月25日（木）に実施された。プログラム全体に関わる実務は、同機構留学推進部門内の短期受入チームが担当し、日本語・日本文化教育センターは、日本語教育と日本文化体験（学外体験を含む）を担当した。

詳細については、グローバル推進機構留学推進部門の「サマースクール」のサイトを参照されたい。

[http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/summer\\_school\\_program/2019/](http://www.glocal.gifu-u.ac.jp/studyabroad/summer_school_program/2019/)

## 5.3 能楽（能・狂言）ワークショップ

2019年7月10日（水）13：30～15：30、能楽（能・狂言）ワークショップを実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2019/07/entry18-7320.html>

### 「留学生と日本人学生のための能楽(能・狂言)ワークショップ」を開催しました

本学グローバル推進機構日本語・日本文化教育センター（以下日文センター）は、7月10日（水）、日文センター和室において「留学生と日本人学生のための能楽（能・狂言）ワークショップ」を開催しました。このワークショップは、サマースクール（受入）で2005年度から開始された日本事情講義「能の講義」と、同じく2007年度から実施の「狂言の講義」が母体となっています。2014年度からは、それまで別日に行なっていた能・狂言それぞれの講義を同一日にまとめ、「能楽」というジャンル全体を体感できるワークショップに進展させました。講師の先生方の熱のこもった楽しいワークショップは留学生に大変好評で、これを留学生等の岐大生のみ提供するのは惜しいと考え、現在は教職員や一般の方の参

加も歓迎するものとなっています。今年度の参加者は、サマースクール参加学生、留学生、日本人学生、教職員、学外からの一般参加者あわせて約80名でした。

今年度の新しい試みとして、昨年度から今年度にかけて整備を進めている日文センター和室を会場としました。和室は、80畳以上の広さを誇る本学の目玉ともなる施設です。ワークショップ開始に先立ち、講師としてお招きした観世流シテ方の味方團先生と田茂井廣道先生（以上能の講師）、大蔵流狂言方の山口耕道先生と茂山忠三郎先生（以上狂言の講師）は、会場にて森脇学長と歓談しました。

講師の先生方は、毎年度工夫を加えてワークショップを実施していただき、今年度は、前半に能、後半に狂言、最後に留学生モデルへの能装束の着付けという内容で進めていただきました。

最初の能のパートでは、代表的演目のひとつである「石橋」が披露されました。学生たちは約8分の演技を、正座をしながら息を吞んで鑑賞しました。その後、能楽の簡単な歴史についての話を聞き、実体験に移りました。先生に従って「高砂」を声高らかに謡いあげ、能の動き方のひとつである「小回り」の練習では、足が絡まって転びそうになりながらも、真剣に挑戦しました。

コメディの狂言ではシリアスな能に対して、笑いが重要な要素です。参加者たちは今までにないほどの大声を出して「大笑い」をし、和室の壁も天井も揺れんばかりでした。狂言には擬音語も多く用いられますが、先生方から「狂言の動物の鳴き声クイズ」が出題され、参加者は頭を捻りました。続いて、狂言鑑賞として「寝音曲」を楽しみました。言葉が完全には分からなくとも、芸能の力で多くの国から集まった人々が一緒に笑い声を上げる素晴らしい場面でした。

ワークショップの最後には、サマースクール参加学生のひとりがモデルとなり、能装束の着付けが行われました。今回は男性の学生がモデルになり、長身に装束が映え、参加者たちのシャッターを切る音が響きました。鬘をつけ唐装束を着した美しい



姿と、鬼になった迫力ある姿、このふたつの装束が披露されました。

プロの方による本物の日本の文化を間近で見聞きし体験できるこのワークショップは、本学にとってかけがえのないイベントとして定着しています。

今後も、グローバル推進機構では、本物の日本文化に触れる機会を提供する活動を展開していきます。

#### 5.4 「十二単の着装と体験：日本の民族衣装」特別講義

2019年12月11日（水）14：00～15：30、十二単の着装と体験を実施した。以下に岐阜大学ホームページ「お知らせ」記事を転載する。

<https://www.gifu-u.ac.jp/news/news/2019/12/entry17-7638.html>

##### 「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました

本学日本語・日本文化教育センター（以下日文センター）は、12月11日（水）、日文センター和室において、日本文化ワークショップ「十二単の着装と体験 ー日本の民族衣装ー」を開催しました。

当日は、日文センター所属の日本語・日本文化研修コース履修生（以下日研生）や社会文化プログラム履修生をはじめ、本学に在籍する留学生や日本人学生及び教職員、更にウィンタースクールプログラムに参加しているインド工科大学グワハティ校とマレーシア国民大学の学生等約40人の参加がありました。

この講義は今年度で6回目となり、「本物にふれる」という日文センターのコンセプトに基づき、本学の学生を対象とした日本文化の体験型教育の一環として開催したものです。講師は、和服の着付けを専門に指導されている伊藤慶子氏、佐藤千里氏、他4名の方々でした。講師の方々は紋付・袴の正装で立ち合わせ、会場に雅楽のBGMが流れる荘厳な雰囲気の中で行われました。

日文センターの土谷教





授から、日本語・英語両言語で十二単の歴史や基礎知識について説明があった後、モデル希望者の中から選抜された日研生のチュアンスワニッチ・アンヤマニーさん（タイ）が、小袖と長袴、化粧の下準備をし、髪に釵子を付けて会場に入室しました。

十二単の着付けでは、講師は作法に従い、「御方様」であるチュアンスワニッチさんに敬意を表しながら、単、五衣、打衣、表着、唐衣、裳を順に着付けました。留学生たちは、緑・蘇芳（ピンク）・紅の鮮やかな衣をまとっていきの様子に興味深く見入っていました。着付け終了後の質問の時間には、「トイレに行くときどうするのですか」「妊娠している人も着ますか」などの質問があり、伊藤講師からお答えいただきました。その後、十二単に檜扇を持ったチュアンスワニッチさんを囲む記念撮影の輪ができました。

重ねたまま脱いだ十二単は形を保つことができ、そのまま羽織ることができます。希望する学生が次々と羽織り、重さに驚きながら友だち同士で写真を撮り合っていました。

本講義は、日本の伝統文化の奥深さ、美しさを堪能することができた有意義なひと時となり、日本文化教育の充実にもつながるものとなりました。

## 5.5 郡上市連携事業

2015年度より本格的に開始した郡上市と本センター（主として日本語・日本文化研修留学生、以下日研生）との連携は、2019年度以下2つの活動を行った。いずれの活動も（株）杉インターフェイスがコーディネートし、郡上市と本センター間を調整した。

- ① 観光立市郡上推進事業「郡上踊りを暮らすように楽しむモニターツアー」：郡上市役所市長公室政策推進課、郡上市役所観光課担当
- ② 郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修）：郡上市役所人事課担当

本活動には、本センター所属の日研生は参加必須、日本社会文化プログラム履修生（以下社会文化）は希望参加、さらに日程的に参加希望者が集まりにくかった①については、日本語研修コースDクラスの希望者も参加可とした。

地域との連携に関する本年度の特記事項としては、福井大学語学教育センター主催のシンポジウム「地域文化を活用した日本語教育」（2019年9月7日（土））にて、郡上市との連携について発表の機会を得たことがある（発表者：土谷）。同シンポジウムでは、「大学・コース・プログラム単位での実践報告」、「授業（科目）単位での実践報告」に分かれて発表が行われ、本学は前者で日研生コースとしてどのように自治体と連携しているかを述べた。発表大学は、金沢大学、岐阜大学、岡山大学、同志社大学、福井大学、北海道大学（ただし発表内容は発表者前任校の秋田大学）、三重大学（以上発表順）で、それぞれの大学の取り組みの特色と工夫を知ることができる有益な機会であった。

以下に本年度の各活動の詳細を報告する。

①観光立市郡上推進事業「郡上おどりを暮らすように楽しむモニターツアー」(2019年8月7日(水))

毎年7月から9月にかけて郡上市で行われる郡上踊りは、国内・国外を問わず多くの人を引き付ける魅力的な文化コンテンツである。踊りの輪に加わり見様見真似で踊る楽しさは格別だが、その楽しさを生み出すために地元の人々がどのような準備をしているのか、踊りを支える基盤はどのようなものかを合わせて体験できるツアーが検討されている。そのモニターツアーに岐大留学生が参加した。参加者は、日研生4名、社会文化1名、日本語研修コースDクラス3名の計8名であった。スケジュールは以下の通りである。

14:45	郡上市八幡着
15:00~16:15	散策、川遊び
16:30~17:00	屋形引き体験
17:15~18:00	郡上踊り講習
18:00~18:30	軽食
18:30~19:00	浴衣着付け
19:00~21:00	郡上八幡城下町花火大会、郡上踊り参加
21:00	着替え
21:30	郡上市八幡発

「水と踊りの町」を謳う郡上八幡の川で遊んだり、郡上踊りのお囃子が生演奏される屋形を地元の方々とともに会場まで引き出したり、自分で浴衣を着たりする内容が盛り込まれた。運よく花火大会日で学生たちは大喜びであった。かなり暑い日だったため、無理して踊らなくていいと学生たちには言ってあったのだが、全員がほぼ踊り通しで、帰る際もまだ踊りたいと後ろ髪を引かれる様子であった。

事後にスマートフォンを使ったアンケートを実施し、概ね高評価であったが、屋形引きについては、自分たちが引き出したあの大きなものは何だったのかという質問があった。引き出す際の屋形はビニールシートでカバーされており、中か何かよく分からなかったらしい。このような見落としを指摘してもらうことは、ツアー形成のうえで有益である。

8月で留学を終えて帰国する学生がほとんどだったが、彼らにとっては岐阜留学の最後を飾る暑く熱い思い出になったことであろう。





②郡上市職員研修（観光立市郡上異文化コミュニケーション研修）（2019年10月31日（木）  
事前研修、11月16日（土）現地研修）

本事業は、前年度初めて実施した郡上市役所人事課の事業である。郡上市役所の各部署で働く人々が、自らが働く郡上についてより深く知ること、それを他者に伝えるコミュニケーション力をつけることが目的である。本学留学生にとっては、学外者と交流し、岐阜もしくは郡上の文化を知る貴重な機会となる。

前年度の反省として、初対面の郡上市役所職員と岐大留学生在が打ち解けるまでの時間が十分なく、よそよそしい態度のまま郡上の町歩きをし、ようやく仲良くなった頃には終了となってしまった点があった。そのため、本年度は職員と留学生の顔合わせを意図した事前研修を行うこととした。事前研修は郡上市役所職員を招き、本学で行った。現地研修は、本学留学生が郡上に赴き、事前研修で打ち解けた職員とともに郡上市を散策した。

参加者は、本学留学生は日研生7名・社会文化6名の計13名、郡上市側は20名であった。事前研修・現地研修のスケジュールは以下の通りである。

【事前研修・2019年10月31日（木）】

- 13：00～14：30 顔合わせ、アイスブレイク、グループ活動（郡上市役所職員＋留学生）
- 14：45～15：45 日文センター教員による講義（郡上市役所職員対象）

【現地研修・2019年11月16日（土）】

- 10：15 郡上市八幡着
- 10：20 開会式
- 10：35～12：30 郡上八幡城、郡上八幡博覧館
- 12：30～15：00 グループごとに昼食・町中散策
- 15：00 閉会式
- 15：15～17：00 留学生自由時間



事前研修では、現地研修の町歩きのグループに分かれて自己紹介や郡上市役所職員による郡上市八幡についてのプレゼンテーションを行った。日文センターの和室を活用し、グループで車座になりリラックスした様子で交流していた。職員持参の浴衣や食品サンプルや三味線も、良い交流のきっかけを生み出していた。交流時間の後、日文センター教員（土谷）が職員対象に特別講義を行ったが、地域自治体職員の興味に合致する話ができただろうか心もとない。次年度への反省としたい。

現地研修はグループごとの活動であったが、事前研修ですでに馴染んでいた効果は非常に大きかった。前年度の反省が大いに生かされたと自負している。昼食場所は、郡上市職員がグループ毎に適切な場所を選択し、アレルギー対応やヴィーガン対応にも十分配慮していた。多様な来訪者を迎える観光立市郡上として、良い経験をしたと思ってもらえたら嬉しい。事業としての活動は15:00までであったが、せっかくの機会なので2時間程度学生に自由時間を与えた。

本事業は、次年度も継続実施見込みとの連絡をすでに受けている。郡上市役所職員にとって「留学生とおしゃべりして楽しかった」以上の成果となっているのか、この2年間の実績を分析する必要があると感じている。



## 6. 交流ラウンジ

2012年4月、旧留学生センターに「交流ラウンジ」が設置されてから、8年になる。2017年4月のセンター移転（共通教育棟4階）に伴い、交流ラウンジの場所も変更となった。そして2018年4月に「日本語・日本文化教育センター（略称：日文センター）」とセンターの名称変更があったが、交流ラウンジの場所やここでの活動内容は変更なく続けている。本稿では、2019年度にこのラウンジで行われた活動や、利用状況などを報告する。

### 6.1 ラウンジチューター活動

交流ラウンジは多目的に活用されているが、中心となるのはラウンジチューター活動である。学期中の平日午後2時45分から4時45分の2時間、1～2名の日本人学生がチューターとして常駐し、ラウンジにやってくる留学生と日本語で交流する場を提供している。

活動時間内にやってくる留学生の目的は様々だが、日本語クラスの宿題チェックやレポートの添削など、日本語学習に関わる活動を目的とする学生が多い。自主的にラウンジを訪れる学生もいるが、まだ日本語での会話に慣れていない初級の学生は利用するのにためらいがあるとも聞く。積極的にラウンジを活用する学生は中上級者が多いようだ。初級学習者である留学生にも利用しやすい雰囲気や取り組みを考えていきたい。

### 6.2 ラウンジチューター企画イベント

毎日のラウンジチューター活動だけでなく、年に二回、ラウンジチューター主催による留学生向けのイベントを開催している。

#### 6.2.1 「七夕まつり」

2019年7月3日（水）14：30～16：30、404セミナー室において「七夕まつり」イベントが開催された。当日は留学生、日本人学生、サマースクールの留学生等34名の参加があった。チューターによる開会のあいさつの後、皆で短冊に日本語や母国語などで願い事を書き笹に吊るした。他に折紙やけん玉も大人気で終始賑わっていた。また、今回も留学生がギター演奏と歌を披露する場があり、演奏も歌もMCもうまく、会場を盛り上げた。最後は記念写真を撮りイベントを終えた。



七夕まつり

### 6.2.2 「日本のお正月」

2020年1月8日（水）14：30～16：30、404セミナー室において「日本のお正月」イベントが開催された。当日は留学生、日本人学生等22名の参加があった。書初めや福笑い、けん玉にこまなど、お正月遊びを楽しんだ。習字は母国で習った留学生も多いようで、皆ともうまく書けていた。一番盛り上がったのはカルタ大会で、いろんな国の留学生によるカルタ取りは見ごたえがあった。今回はスライドショーを使って日本のお正月の風習や食



お正月イベント



べ物の説明が日本語と英語であり、最後に〇×クイズも実施された。留学生と日本人学生との交流だけでなく、留学生はお正月について、楽しく詳しく学べた機会となったであろう。

### 6.3 ラウンジの利用者数

ラウンジがどのくらい利用されているのかを把握するため、開設当初からのべ利用者数をまとめている（表1）。2016年度から、ラウンジチューターイベント（七夕まつり、お正月イベント）の参加者を除いた数としているため、この年度の利用者の数が減っているが、徐々に利用者数が増えてきていることがわかる。今年度は、例年利用者が少ない金曜日にチューター配置をやめたこともあり、少し人数は減っているものの、実際にはチューター配置時間以外にもラウンジで印刷したり、休み時間を過ごしたり、昼ご飯を食べたりする学生も、曜日に関わらず見られるようになった。交流ラウンジの場所も認知され、利用してもらえるようになってきた証拠ともいえよう。

表1. ラウンジの利用状況（チューター配置時のみ。利用者数には日本人学生含む）

年度	前期配置期間と利用者数	後期配置期間と利用者数	合計
2019	4月11日～7月31日 376人	10月10日～2月7日 324人	700人
2018	4月13日～7月30日 405人	10月9日～2月8日 320人	725人
2017	4月17日～7月26日 330人 (金曜日は閉室)	10月10日～2月7日 296人	626人
2016	4月18日～7月28日 209人 (金曜日は閉室)	10月11日～2月10日 348人	557人
2015	4月13日～7月31日 354人 (金曜日は閉室)	10月12日～2月4日 301人	655人
2014	4月14日～7月31日 543人	10月14日～2月10日 438人	981人
2013	4月15日～8月2日 420人	10月10日～2月7日 333人	753人
2012	5月28日～8月3日 310人	10月10日～2月8日 558人	868人

ラウンジは、ラウンジチューター活動以外にも、日本語研修コースのクラス発表、社会文化プログラムのオリエンテーション、個人チューターの指導、学生との面談等、様々な用途で使用されている。また、日本人学生向けの海外留学や学術交流協定校に関する資料、

留学経験者の報告書もあり、留学に関する情報収集をすることもできる。ラウンジの壁面には日本語・日本文化教育センターで行われた様々なイベントの写真や、日本語授業で行われた発表ポスターなども掲示している。

これからも、留学生そして日本人学生共に、誰もが気軽に利用できる場となるよう、環境づくりや広報活動に力をいれていきたい。



交流ラウンジ





岐阜大学外国人留学生数 (国別)

令和2年3月1日 現在

学部等 区分 国名・地域	教育研究科 教育学部		地域科学部 地域科学研究科		医学研究科 医学部		工学研究科 工学部		応用生物科学研究科 応用生物科学部		自然科学技術研究科		連合農学 研究科		連合医学 研究科		共同医学 研究科		連合創薬医療情報 研究科		流域科学研究所 センター		日本語教育 センター		小計		合計	
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費		
大韓民国																												
中華人民共和国	1	2	7																									
モンゴル国																												
ベトナム社会主義共和国																												
インドネシア共和国																												
マレーシア																												
タイ王国																												
ミャンマー連邦																												
インド																												
パキスタン・イスラム共和国																												
バングラデシュ人民共和国																												
カンボジア王国																												
東ティモール民主共和国																												
オーストラリア連邦																												
トンガ王国																												
エジプト・アラブ共和国																												
シエラレオネ共和国																												
ガーナ共和国																												
コンゴ民主共和国																												
ケニア共和国																												
スバイン																												
フランス共和国																												
スウェーデン王国																												
ポーランド共和国																												
ロシア連邦																												
アメリカ合衆国																												
ベルギー共和国																												
アフガニスタン・イスラム共和国																												
ブルネイ・ダルサラーム国																												
総 合 計	1	2	7																									

左は男性、右(網掛け)は女性  
 国名順は、外務省外務報道官編集「世界の国一覽表」による



岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2019

執 筆 者

松	尾	憲	暁	日本語・日本文化教育センター特任助教
土	谷	桃	子	日本語・日本文化教育センター教授

編 集 委 員

橋	本	慎	吾	日本語・日本文化教育センター長（編集委員長）
土	谷	桃	子	日本語・日本文化教育センター教授
森	田	晃	一	日本語・日本文化教育センター教授
吉	成	祐	子	日本語・日本文化教育センター准教授
松	尾	憲	暁	日本語・日本文化教育センター特任助教

岐阜大学 日本語・日本文化教育センター紀要 2019

2020年8月発行

岐阜市柳戸1番1

編集兼  
発行者 岐阜大学 日本語・日本文化教育センター  
責任者 橋 本 慎 吾

印刷所 西濃印刷株式会社

岐阜市七軒町15番地

**Bulletin of the Center for Japanese Language and Culture**  
**Gifu University**  
**2019**

**Preface :** HASHIMOTO Shingo..... 1

**1. Article**

MATSUO Noriaki

Changes in Approach to Teaching “Japanese Culture” by Japanese Teachers  
from Multilingual and Multicultural Backgrounds: An Analysis  
of a Narrative by Lecturer “K” Based in a University in China ..... 3

TSUCHIYA Momoko

One aspect of *Ji-shibai* (Kabuki performed by local people) in Meiji era:  
Some facts which newspaper articles about Gujo show .....17

**2. Annual Report (2019.4-2020.3)**

*Published by*  
*Center for Japanese Language and Culture*  
*Gifu University, Gifu 501-1193, Japan*